

大阪文化財センター調査報告XV

寺門団地他3団地開発予定地内 埋蔵文化財試掘調査報告書

昭和50年10月

財団法人 大阪文化財センター

は し が き

大阪文化財センター
理事長 加藤三之雄

松尾川と槇尾川の合流する和泉市寺門町附近は、整然とした古代の条里が良く遺存するところであります。今回の調査では古く弥生時代、古墳時代からこの地に居住した人々の生活が土に刻まれて残っていることが確認されました。弥生時代や古墳時代の古い遺構は条里制を始めとした水田開発によっていくらか破壊されていました。

そして今度は現代の開発です。現代の開発は近年の産業構造の変化によって土地利用は一変し、遺跡の壊滅的破壊をもたらしています。現代が文字がなかった時代の、あるいは記録を残さなかった祖先の「土に刻まれた歴史」をさぐる最後の機会になるか否かが今日の文化財行政に荷せられた今日的課題であります。幸いにも寺門第1、第2団地、今福団地、府中団地建設予定地は大阪府住宅供給公社の援助のもとに今回遺跡の在否についての確認調査を実施し、遺跡を新発見することが出来ました。この遺跡の基本データをまとめた本報告が遺跡保存の任を果すことを望むものであります。

昭和50年10月

例 言

- 1) 本冊子は、大阪府住宅供給公社の委託を受けて財団法人大阪文化財センターが実施した寺門団地他3団地開発予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書である。
- 2) 調査に要した経費(¥ 8,703,000.-)はすべて大阪府住宅供給公社が負担した。
- 3) 調査は、財団法人大阪文化財センター業務課調査室が担当し、昭和50年6月28日から、昭和50年9月17日迄の間実施した。
- 4) 現地に於ける調査は、調査室長中西靖人の指示のもと、調査主任辻内義浩が担当し、杉本二郎(立命館大学OB)、寺川史郎(京都産業大学OB)、赤木克視(明治大学OB)、西村英利(法政大学OB)、山崎 博(立命館大学学生)の諸氏が調査員として、また、尾下守弘(大阪外国語大学学生)、河合一彦(大阪工業大学学生)の諸君が調査補助員として協力した。
- 5) 出土遺物の整理は、主に赤木克視がこれにあたり、遺物の実測は山崎 博、寺川史郎、安井幸雄(財団法人元興寺仏教民俗資料研究所員)が担当した。
- 6) 本冊子の執筆は、中西靖人、辻内義浩、赤木克視が分担し、図版は、杉本二郎、寺川史郎、山崎 博がこれを補助した。また全体の監修は、中西靖人、辻内義浩が行なった。
- 7) 寺門1号墳、及び2号墳より出土した鉄製品及び金環、銀環は、その保存処理等を財団法人元興寺民俗資料研究所保存科学研究室に委託した。
- 8) 調査に際しては、大阪府住宅供給公社の関係各位、特に開発部計画副参事、松田鈺彌氏、及び主事、松山隆英氏には、一方ならぬ協力と援助を受けた。記して感謝する次第である。
- 9) 調査に関する機械、作業員等は、前田建設工業株式会社が請負った。



第1図 調査関係者詰所と標識

目次

はしがき

例言

〔Ⅰ〕調査に至る経過	1
〔Ⅱ〕位置と環境	2
〔Ⅲ〕調査の結果	3
寺門第1地区の調査	3
今福地区の調査	11
寺門第2地区の調査	15
府中地区の調査	17
〔Ⅳ〕まとめ	18

挿図目次

第1図	調査関係者詰所と標識
第2図	寺門第2地区紡錘車出土状況
第3図	和泉府中近辺の条理制
第4図	寺門1号墳第2主体検出作業
第5図	寺門1号墳第2主体（横穴式石室）第1次床面実測図
第6図	寺門2号墳配石土壇墓平面実測図
第7図	今福地区第1-3トレンチ遺物出土状況
第8図	寺門第2地区第3トレンチ平面、断面実測図

図版目次

- 図版一 調査地周辺の遺跡分布図
- ㄥ 二 調査地内トレンチ設定位置図
- ㄥ 三 寺門第1地区写真
- ㄥ 四 寺門第1地区写真
- ㄥ 五 寺門第1地区写真
- ㄥ 六 寺門第1地区写真
- ㄥ 七 寺門第1地区写真
- ㄥ 八 寺門第1地区写真
- ㄥ 九 寺門第2地区写真
- ㄥ 十 寺門第2地区写真
- ㄥ 十一 寺門第2地区写真
- ㄥ 十二 寺門第2地区写真
- ㄥ 十三 寺門第2地区写真
- ㄥ 十四 寺門第1地区 1号墳出土遺物
- ㄥ 十五 寺門第1地区、第2地区出土遺物
- ㄥ 十六 寺門第1地区、1号墳、2号墳測量図
- ㄥ 十七 寺門第1地区、1号墳、2号墳トレンチ位置図
- ㄥ 十八 寺門第1地区、第2トレンチ平面、断面実測図
- ㄥ 十九 寺門第1地区、第2、4、5トレンチ平面図、断面実測図
- ㄥ 二十 寺門第1地区、第1トレンチ平面、断面実測図
- ㄥ 二十一 寺門第1地区、1号墳第1主体(木棺直葬)平面、断面実測図
- ㄥ 二十二 寺門第1地区、1号墳第2主体(横穴式石室)実測図
- ㄥ 二十三 寺門第2地区、第1トレンチ平面、断面実測図
- ㄥ 二十四 寺門第2地区、第2トレンチ平面、断面実測図
- ㄥ 二十五 寺門第2地区、第2トレンチ平面、断面実測図、和泉府中地区、断面実測図
- ㄥ 二十六 今福地区、第1、2トレンチ、平面、断面実測図
- ㄥ 二十七 今福地区、第2トレンチ平面、断面実測図
- ㄥ 二十八 寺門第1地区、1号墳出土土器実測図
- ㄥ 二十九 寺門第1地区、2号墳、寺門第2地区、今福地区出土土器実測図
- ㄥ 三十 寺門第1、2地区出土遺物実測図

〔 I 〕調査に至る経過

今回、調査の対象となった地域は、和泉市府中町、同寺門、同寺門和気町、同今福中の各地の一部大阪府住宅供給公社開発計画用地である。

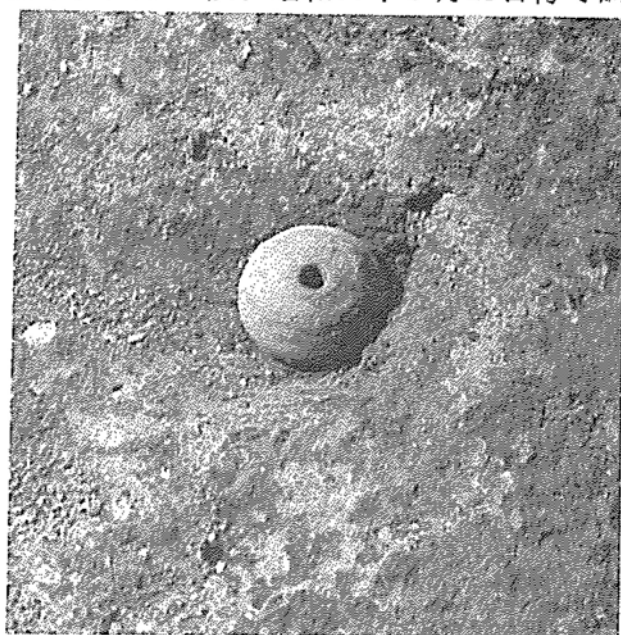
従来、この地の東の丘陵地一帯には、弥生時代後期の一大集落址として著名な観音寺山遺跡が存在することが知られており、また古墳時代の史蹟として有名な摩湯山古墳が存在することが知られている。

このように周囲1km以内に弥生時代から、中世までの各種の遺跡が存在する当該開発計画地は、また現在でも、条里が顕著に認められ、さらに地理的にも松尾川と槇尾川にはさまれた微高地上にあることから、十分に古代若しくは中世の人々の生活の場であったことが想像されるところである。

この地を開発しようと計画した大阪府住宅供給公社は、前後2回にわたって大阪府教育委員会と開発について協議を行なった。その結果、大阪府教育委員会は、昭和50年5月、各開発予定地全てについて、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施する必要があること、及び、その調査は、財団法人大阪文化財センターで実施するようにとの指導を大阪府住宅供給公社へ回答した。

この旨回答を受けた大阪府住宅供給公社は、昭和50年5月27日、財団法人大阪文化財センターに上述の調査を依頼し、協議の後、昭和50年6月13日付で調査契約を締結した、これによって

財団法人大阪文化財センターは、昭和50年6月28日より現地に於ける試掘調査に着手し、昭和50年9月17日に終了した。また遺物整理は、調査終了と同時に開始し、その一部の作業を10月31日迄の間実施した。



第2図 寺門第2地区紡錘車出土状況

〔Ⅱ〕位置と環境

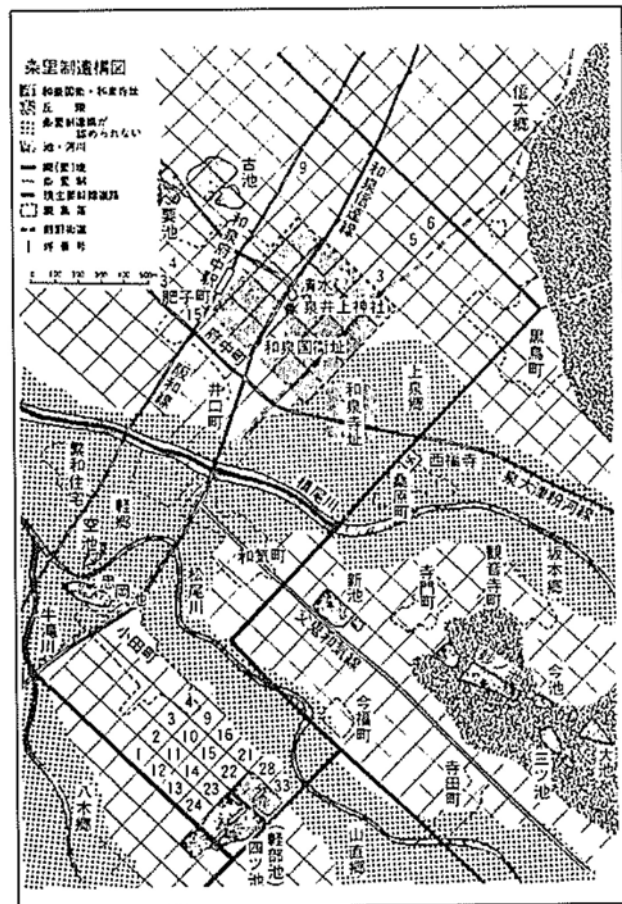
当該調査対象地は、国鉄阪和線和泉府中駅より南東約1 km、府道大阪和泉信達線和気交叉点より東へ約500m入った地域に位置し、地籍は和泉市寺門町、同府中町、同今福中である。

この地域は、中期洪積層の高位段丘の末端部と、松尾川、槇尾川が形成する沖積平野からなっている。ちなみに細分するなら、寺門第1団地建設予定地は前者に位置し、その他の3地区（今福団地、寺門第2団地、府中団地各開発予定地）は後者に位置する。

この様に、当該調査対象地は、前面に大阪湾をのぞみ、背後に丘陵を持ち、両側に川を有するという極めて人間が生活するに理想的な環境にある。古代の人々にもこの地の利は重要な要素であったと思われ、その証しとして当該調査地周辺には多数の遺跡が存在することが知られている。さらにこれらの遺跡は、時期的にみても無土器文化の時代から、中、近世にかけて全てがそろっており、遺跡の性格也多岐にわたっている。

その中で、当該調査対象地に隣接する代表的な遺跡として観音寺山遺跡がある。この遺跡は、標高60m全後の低平な丘陵上に位置する弥生時代後期の一大集落である。

和泉市域には、これより先、弥生時代前期～中期～後期にわたる一大集落としての池上曾根遺跡が存在するが、距離的に遠いこともあって、今回の調査対象の沖積平野部にこの観音寺山遺跡の母体と



第3図 和泉府中近辺の条里制（和泉市史第1巻より）

なった集落の存在が充分予想される場所である。

またこの地域には、条里制遺構が顕著に認められる地域でもある。ただし、松尾川及び槇尾川の周辺地域は条里が乱れており、これら2河川の氾濫等が、相当なものであったことがうかがえる。

〔Ⅲ〕調査の結果

今回の調査対象地は、近接してはいるものの4ヶ所に分れている。調査は各地区毎に開発予定地の中心部に巾3mのトレンチを任意に設定し、また平野部においては、周辺部の状態をも確認するための一辺3m四方のトレンチをも任意に設定して遺物包含層の有無、遺構の有無、埋没深度、遺物の量、時期等を出来るかぎり正確に把握するようにした。

また、寺門第1団地建設予定地については、丘陵頂部を十字に分断する形でトレンチを設定したところ、中世以降の墓地群と共に、古墳時代後期の横穴式石室、木棺直葬墳を検出したため、これら主体部については、完掘することとなった。

以下、各地区毎に分けて、調査の結果の概略を記してみたい。

〔寺門第1地区の調査〕

寺門第1団地建設予定地は、槇尾川と松尾川に挟まれた洪積層の低い丘陵の突端部に位置している。この標高約100m～40mの丘陵地帯には、弥生時代後期の高地性集落として有名な観音寺山遺跡が存在し、また、その位置はさだかではないが、観音寺山古墳群が存在することでも知られている。

現状は、和泉市の火葬場と墓地、及び日相寺と呼ばれる小寺が丘陵頂部に存在し、これらの周辺部は既に大きく削り取られて、古しえの旧観をとどめてはいない。さらに、東向きの斜面は一面に竹林であるため後世相当の攪乱を受けている。したがって今回の調査も、旧状をとどめている丘陵頂部にその主眼を置いた。

調査した結果によると、これら丘陵頂部には、中世の墓地としての土塚が一面に認められ、さらに一番高い小丘には2基の古墳時代後期の古墳が検出された。

以下、時代をおって各々の遺構について詳述いたしたい。

(a) 寺門1号墳

寺門1号墳は、日相寺と、共同墓地の間に存在する小高い丘の頂上部に位置する。測量の結果によると、墳頂部55m 75cm、基底面54m 00cmにおく、高さ約1 m 75cmの方墳であり、基底部一辺長は、約16mを測る。調査の結果によれば、墳丘は、後述する中世墓地でいたるところで攪乱を受けている。

当該古墳は、主体部複数墳である。墳丘断面の観察結果によると墳丘中央部に木棺を先に埋葬し、その後墳丘北辺よりに小規模な横穴式石室を構築し、同一墳丘に埋葬施設を2基もつ形となったと思われる。

この様な、方墳で、同一墳丘に2基以上の主体部をもつものとしては、堺市の塔塚古墳が知られているが、時期的には当該石室の方が新しいし、規模もはるかに小さい。

以下主体部を中心に詳細を記す。

◎第1主体(木棺直葬)

一号墳の第1主体である木棺直葬墓は、丘陵頂部平端面が、斜面に移行しはじめる所に、墳丘中央からは若干南に寄った位置に作られている。主軸はN-56.6-E、掘方長辺404cm、北東端一辺180cm南西端のそれは204cm、木棺自体の大きさは、長辺336cm 南西端一辺67cm、北東端は崩れているため詳細は不明であるが、現況83cmを数える。

木棺の高さは、裏込めの土が充填されているレベルか、やや下までとすると南西端で50cmを数えるので、40~50cm程度のものであろう。

墳丘は、丘陵上に数多く存在する植木採集穴や、中世の土塚墓等の為に、かなりの攪乱を受けており、土塚もその影響を免れえていない。しかしその影響

は、底面にまで達する土塚中央部の一ヶ所を除いて、封土半ばで止まっており、土塚そのものの保存状態は良好であった。

土塚は、若干の盛土を成したあと、掘り込まれている。その盛土は、斜面を平坦にする程度のものであり、攪乱を受けていない南北方向で見ると、径約4m、高さ0.4mである。そのために斜面の落ち際にある土塚南側の肩では、ほとんど盛土の部分が見られない。土塚は、そのように平坦にされた盛土の中央部に、巾の広い隅丸長方形の土塚を掘削し、その中央に木棺を安置している。土塚の底は平坦であり、小口の跡も検出されなかった所から、東北部がやや巾の広い組合せ式の箱式木棺が使用されたものと思われる。

土塚内で注目されるのは、側板に相当する所にある裏込の土とは不整合を示す厚さ10cm内外の板状に入った層である。解釈に苦しむ層であるが、木棺の腐食した後に入りこんだ土層であるとするのが一番妥当なようである。小口板に相当する部分に、これに対応する層を検出できなかったものの、側板の厚さが10cm内外であったとすれば、厚さも適当であるし、南西端両側に土が充填されずに、空間として残っていた部分が存在していたことと、またわずかではあるが、朱の痕跡がこの層の内側壁に付着していたことから、この説が裏付け出来るであろう。

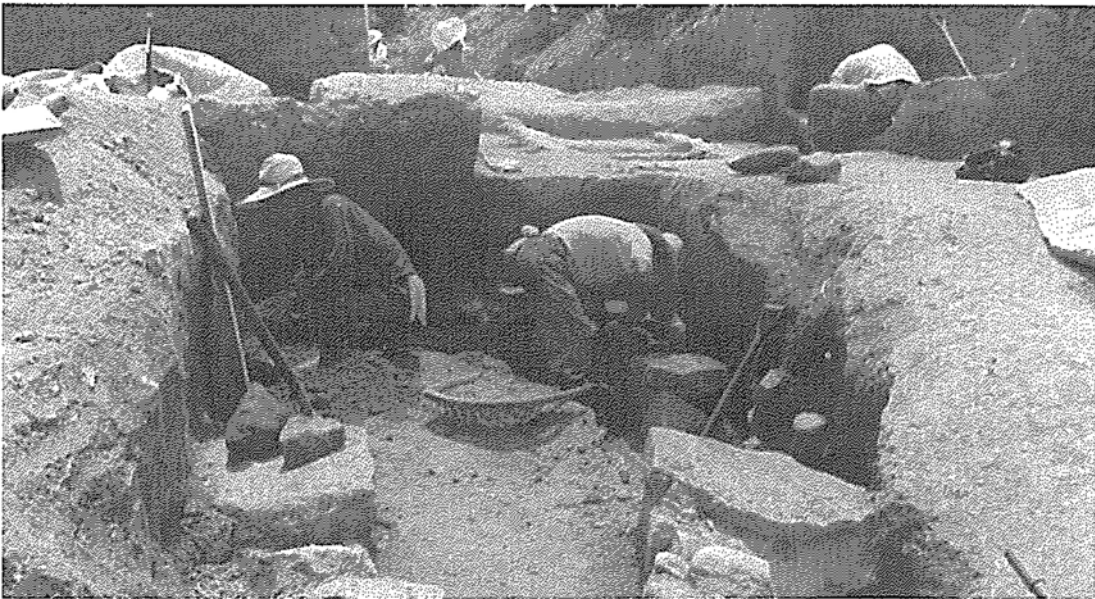
この他に、南西端に存在する赤褐色砂礫層も特異な土層である。ここだけに見られるもので、天井板の上にあった土とは思われず、小口板と側板の末端との間に入れられたものかも知れない。

裏込の土は、西側では互層状を呈し、地山の赤褐色粘質土と、漸移層である黄褐色粘質土とを、交互に積んで固めている状態がよく判るが、他の部分は、両層が混融しており、分離することはできなかった。裏込めは、一気になされたものではなく、半分ほど埋めた段階で、灰混じりの黒色粘質土を全域に敷いており、この時点でなんらかの埋葬儀礼が行なわれた可能性もある。

副葬品は、東端北寄りに須恵器の壺(図版28の1)と、その蓋(同10)、南西部西側に刀子一口(図版30の9)、および中央部に鉄鏃片が4個散乱していた。

壺は床面よりやや浮いており、約40°ほど傾いた状態で出土した。蓋は数片に割れて周辺に散乱していたが、破片は完全に復元された。天井板が腐食して、土が落下した時の衝撃で破碎されたもので、壺そのものは、ほぼ原位置を保っているものと思われる。刀子は、東北側に把を、刃部を上に向けた状態で出土した。現在長16.0cmで、切先部と把の一部を欠いているだけで、ほぼ完形に近いものである。鹿角と見られる角製の把を持ち、身部の一部に鞣の材質と思われる有機物の付着が見られる。鉄鏃は土坑中央部にある攪乱のために、原位置を止めていない。総数も不明であるが、身部が3点出土していることと、また攪乱の影響も最少限に止どまっている所から、あまりこの数以上には副葬されていなかったものと思われる。長頸の逆刺のない長三角形を呈するものが2点、身部のみの破片が1点出土。他に頸部のみの破片が1点出土しているが、身の部分とは接合しなかった。

◎第2主体(横穴式石室)



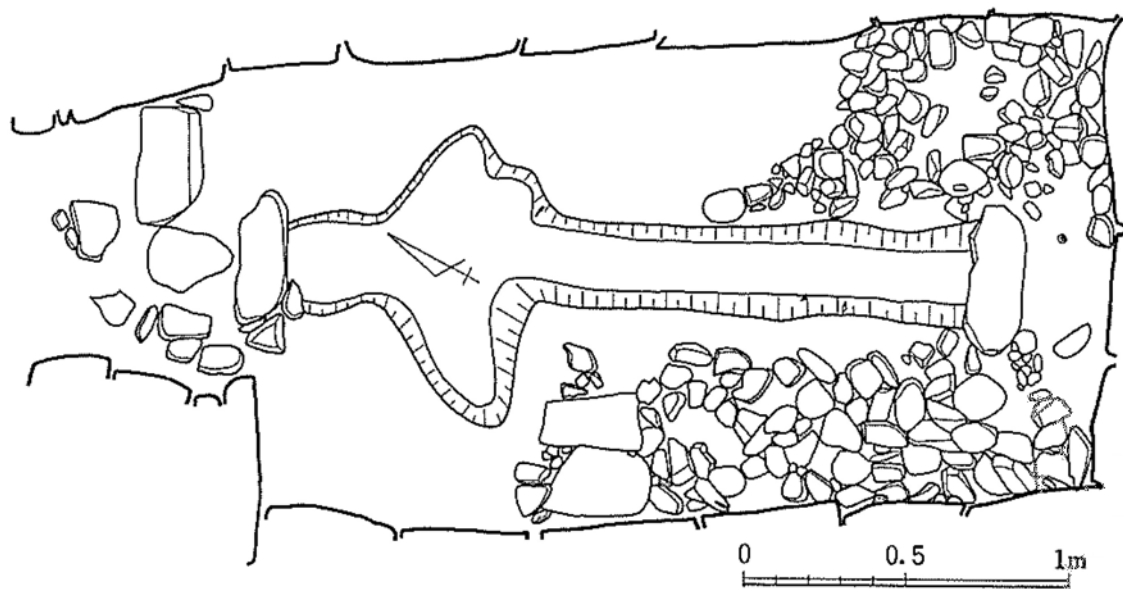
第4図 寺門1号墳第2主体検出作業

当該主体部は、左片袖の横穴式石室である。主軸方向は極めて希な例として、N-30°Wで北北西へ開口する。地層観察の結果、当該横穴式石室は、先述の木棺直葬より後に構築されたことが明らかである。これは、先述した木棺直葬墓を先に墳近中央部やや南東よりに埋葬したため、この第1号主体を破壊せず

に、且つ、方形の一辺の中心部に羨道を位置づけ、石室を構築することを考えたため、やむおえずこの様な開口方向になったと考えたい。天井石はすべて抜き去られており、また奥壁、両側壁は基底石を含めて2～3段しか残っていない。石室を設置するために穿った墓坑は、幅2.3mと、石組外辺部がやっと入る程度のものである。

石室は、羨門から奥壁までが4 m35cm、奥壁が幅1 m55cm、玄室長2 m50cm、を測る。羨門部の側壁が一番残りがよく、基底面から約1 m余を測ることからすくなくとも、天井は1 m以上はあったものと推定される。

玄室床面は、地山を掘り込んだ後、フラットに整形し、玄室中央部より羨道に向って排水溝を穿ち、その両側に直径約5～10cm程度の河原石が敷かれている。また玄門には、閉塞石の一部が残っていた。さらに羨道中央部と玄室の床面には、約10cm程度の差があり、これが排水溝の底面のレベルとほぼ等しいことから、羨道全体が排水溝の役割りをもはたしていた可能性がある。



第5図 寺門1号墳第2主体(横穴式石室)第1次床面実測図

この様な当石室は、規模が小さいにもかかわらず、横穴式石室の本来の機能としての複次埋葬を行なっている。第1次埋葬は、玄室、中央に存在する排水

溝より左側に棺台と考えられる花崗岩の板石が2枚置かれており、3本の鉄釘がこの部分に残存していることから、この部分に埋葬されていた様であるが、追葬時の攪乱及び後世の攪乱により、それを確とする証しはない。副葬品も1個の銀環以外は追葬時に整理されてしまったのか、ほとんど残っておらず、墳丘上部及び外辺部のトレンチから検出された器台の破片（図版28の13～21）等が、その時の副葬品ではなかったのかと考えている。さらに、敷石の状態からみて、第1次埋葬時には、排水構は掘り込まれた状態であったと思われる。

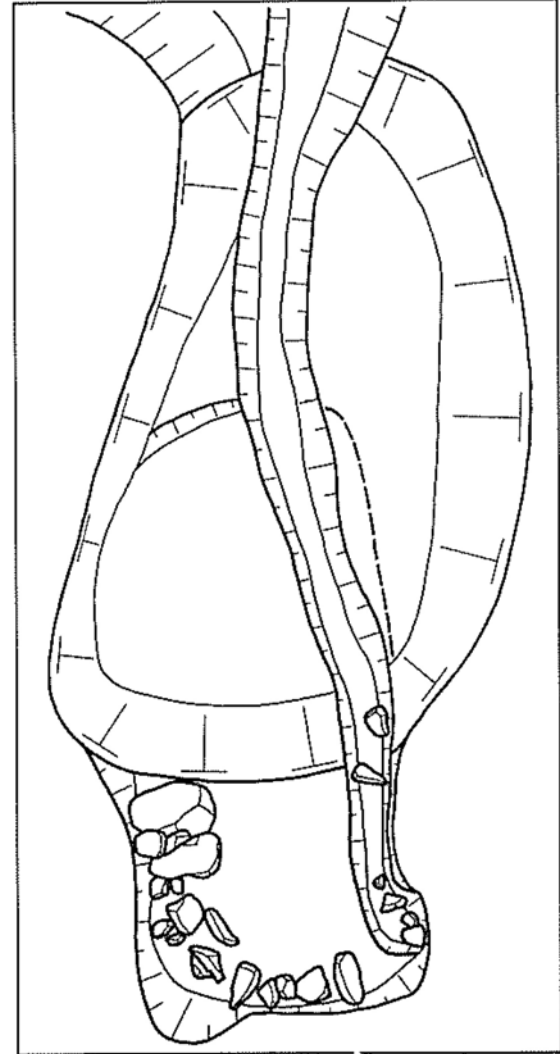
第2次埋葬は、第1次埋葬後玄室内を整理し、新たに直径3～5cmの小石をやはり排水構の両側に追加し、整形した後、こんどは玄室右側に埋置したものと考える。このことは、木棺に使用されたとされる鉄釘（図版30）の分布がこの部分に集中しており、また身に付けていたと思われる金環が出土していることからである。副葬品としては、鉄刀の完形1口、（図版30の25）碧玉製の平玉1個（同24）、金環1個（同 ）、鉄鏃（同7，8）、刀子（同10）、須恵器蓋杯1対（図版28の1，2，3）、高杯2個（同6，8）、柑1口（同5）、台付長頸壺1個、壺蓋1個（同9）、その他小片多数である。土師器は小形壺の低部が1片（同7）出土しているが、攪乱層直下であり、時期的にみても、当該被葬者に対する副葬品とは考え難い。他には前庭部出土の小型壺は供献土器とも考えられるが、第1、2次埋葬のいずれに伴うものかは不明である。

上述の土器はすべて6世紀中葉頃であり、墳丘攪乱土中の出土土器（図版28の13～21）も片口や瓦を除いてすべて6世紀中葉である。また第1主体出土の土器も6世紀中葉であり、従って寺門1号墳は木棺直葬墓、横穴式石室での第1次、第2次埋葬の順に葬むられているが、それらの間には土器型式から窺う限り顕著な年代差は認められない。従って6世紀中頃の約20～25年の間に次々に埋葬されたものであろう。

(b) 寺門 2 号墳

寺門 2 号墳は、寺門 1 号墳の北東約 13m の同一尾根頂部に位置する。測量の結果によると、墳頂部 54m50cm、基底面 53m75cm におく、高さ約 75cm 程度の小規模な方形墳である。

墳丘は後世に盗掘を受けており、中心部は大きく掘り込まれている。また墳丘東南部は、竹藪としての開墾によって削り取られており、旧状は大きく変形している。主体部は、最近堺市野々井遺跡で発見された古墳にみられるのと同様に、墳丘上に土壇を穿った後この土壇の底部周辺に人頭大程度の河原石を配石したものである。配石された石は、当該古墳の場合は一段であるが、攪乱を受けているため最初から一段であったとの断言は出来ない。しか



第 6 図 寺門 2 号墳配石土壇墓平面実測図

し、苦し、これらの石が 2 段以上に積まれていたとしても、横穴式石室の様に天井を構築するような規模は考えられず、石室としての空間を有するものではなかったであろうと思われる。

さらに、この様な主体部には、木棺が埋置されたのか、ただ単に土壇墓として機能したのかは明らかではない。したがって、ここではこの様な主体部を一応配石土壇墓と呼んでおくことにする。

調査の結果によると、この配石土壇は、先述したとおり後世に盗掘を受けて、西側半分が地山以下まで掘削されており、わずかに排水溝の痕跡をとどめるにすぎず、正確な長さや巾を知ることは出来ないが、土壇の底部巾は約 55cm、長さは約 130cm であり、配石内側の巾は約 30cm である。この土壇も北側壁にそって

巾約10cmの排水溝が地山を穿って掘り込まれている。この排水溝は土広外まで続いており、斜面に出ている。副葬品として床面に密着した状態で検出されたものはないが、床面直上まで達している攪乱層より出土したものとして、鉄鏃5本、須恵器の蓋杯3対等が認められ、これらが当時副葬されていたものと思われるが、位置等は確認出来なかった。

(c) 中世墳墓

2基の古墳が築かれたこの丘陵は、中世になっても引き続き墓地として使用された。その総数は、かなりの数になるものと思われるが、墓地の旧状を止めているのは、古墳周辺のみであり、その全容を知ることは既に困難である。中世墳墓は、かつてはこの丘陵上に広く分布していたと思われる。

今回の調査は試掘であったため、トレンチの拡張等は最少限に止めざるをえず、検出された墓塚も完掘できたものは少なかった。ここでは不十分な資料であるが、調査でうかがわれた中世墳墓の多様な埋葬形態の一端を、簡単に触れて見たい。

墓塚の形態としては、3種に分類できる。それは、長方形のプランを持つ大型の深い土塚(①)、楕円形、及び隅丸方形の整ったプランを持つ小型の比較的浅い土塚(②)、不整形なプランを持つ土塚(③)である。①の長辺は不明であるが、短辺でも1mを優に越えており、深さも1m前後はある。その大きさから、おそらくは土葬墓と思われる。②は、長辺でも1m前後であり、深さもせいぜい5～6cm程度である。人骨の出土を見たのも、多くはこの種の土塚であり、数も一番多い。これらの土塚が火葬骨を埋葬したものかどうかは確言は出来ないが、土塚の容積が小さいことや、人骨が多く細片化していること、炭化物の混入が顕著に見られること等から、その中のかなりの部分が、火葬墓であった可能性が強い。③は、②と共通する特色を持った土塚もあるが、墓であることすらも否定的な性格不明なものも多い。

また、これらの土塚群には、その内部に河原石を含むものがある。河原石の入っている土塚は②のタイプに多いが、③のタイプにも認められる。

石の数は総体に少なく、例外はあるがおおむね数個の範囲に止まっている。この石は、土塚中から検出されたが、おそらく当初は土塚の上におかれていたものであろう。

さらに、土塚内には、瓦の混入も顕著に見られる。出土状態は河原石と同様、土塚の覆土上部か中部止りで、どのような性格をもつものかは不明である。瓦の種類は、須恵質や焼きの甘い布目瓦や、時期の下る布目のない瓦まで種々多多であり、上代末より、近世初頭ぐらゐまでに比定できる。

土器は鎌倉時代のものと思われる退化した高台を持つ瓦質の椀と、土師質の灯明皿を出土した1例を除いて、ほとんど見られなかった。

これらの単なる土塚墓とは別に、土塚を伴う性格不明の遺構が存在する。流出が激しく、土塚も底部がかろうじて残っているにすぎないか、地山を整形してテラス状にし、斜面側を0.5mの段に作り出している。そしてその中央に掘られた土塚からは、斜面に向けて溝が切られている。今回の調査では、これが墳墓であるとする根拠は見い出せなかった。

このように寺門Ⅰ地点には、種々の墳墓形態が見られ、中世の墓制を解明する上での貴重な資料を抱有しているものと思われる。

〔今福地区の調査〕

今福町の街並みの北西にひろがり、府道父鬼一和気線と松尾川にはさまれた水田地帯が調査対象地域である。寺門第2地区と同じく条理制のよく遺存する水田地帯である。調査対象地域の南端部で北東から南西方向に4本のトレンチと、中央部では南東から北西方向に2本のトレンチを設定した。更に建設予定地の縁辺部で4ヶ所のツボ掘りを行なった。トレンチは3m幅で、総延長約200mであり、ツボ掘りは3m方形で掘削した。

1-1 トレンチ

調査対象地域の南縁に近い部分で東西に設定した第1トレンチを、水路等の

為4本に分割したが、その東端のトレンチである。遺物は最下層まで出土するが、遺物の量が多くなるのは地表下約1mの灰褐色粘質土層になってからである。この層中には瓦器、須恵器、土師器等の土器を含むがほとんど全て小片であり、プリミティブな包含層ではない。又水が多量にしみ出し遺構の検出作業は困難であったが遺構は伴はないとして大誤ないであろう。

1-2 トレンチ

1-1トレンチに続くトレンチである。1-1トレンチと同様遺物は耕土から最下層まで出土するが灰褐色包含層を除き量は少ない。しかしこの灰褐色包含層も須恵器、瓦器等が混存し、弥生式土器片が耕土中から出土するなど、後世の整地等による攪乱を受けているのはまちがいない。

灰褐色包含層は1-1トレンチから連らなり、南西に進むに従って浅くなり、地表下50~60cmになる。そしてトレンチ南西端では灰褐色包含層の下層に黒色有機質土を含む良好な包含層が検出された。

現在遺物の整理中であるが、弥生時代後期から古墳時代前期の土器（第5様式、古式土師）が多く、若干第4様式の弥生式土器と6世紀中葉の須恵器を含むようである。しかし、これらの土器に伴う遺構は検出されなかった。

1-3 トレンチ

1-2トレンチから南西へ約2mの間をあけて1-3トレンチを設定した。1-2トレンチで検出された弥生式土器を含む6世紀中葉以前の包含層はトレンチ隅で検出された井戸の為、すでに攪乱されておりこのトレンチには続かなかったが、しかし井戸の横



第7図 今福地区第1-3トレンチ遺物出土状況

の攪乱層より第5様式の完形の壺（第7図、図版29の27）だけが出土した。

井戸は下部をたて板で囲み、横に渡した丸太で支えられている。上部はこの板組みの上に井桁に丸太を組んで渡し、その上に河原石を積み上げ井戸枠を作っている。井戸の築造年代は床土下の第3層を切り込んで掘方を掘っている点や、井戸中より染付けの磁器が出土した点から近世のものであろう。

1-1、1-2トレンチで認められた弥生時代から中世に至るまでの土器片を出土する包含層はこのトレンチでは更に浅く地表下40~50cmの深度で続いている。遺構は溝やピットが検出されたが、建造物を想定し得るほどのまとまりを示さなかった。

他にトレンチ南西部のほうでは遺物の量が少なくなった点が注目される。

1-4 トレンチ

第1トレンチの西端に当たるトレンチである。1-1、1-2トレンチで認められた弥生時代から中世に至るまでの土器片を出土する包含層は、地表下約40~50cmで続き、須恵器の出土が多くなったのが注目されるが、いずれも小片である。遺構は検出されなかった。

2-1 トレンチ

調査対象地域のほぼ中央部で南北方向に1-3トレンチと直角に設定したトレンチである。1-3トレンチと同様の須恵器、土師器、瓦器等を出土する包含層が地表下40~50cmで認められた。地山はかたい砂礫層で遺構は検出されなかった。

2-2 トレンチ

2-1トレンチとコンクリート舗装した通学路をはさんで続くトレンチである。このトレンチでは地山まで地表下40~50cmであり、黄褐色土の地山上に灰褐色の包含層が一様に堆積している。この包含層はごくわずかの弥生式土器のほか、土師器から近世土器まで含んでいる。今まで述べてきた各トレンチの瓦

器を含む包含層と対応すると考えられるが、近世遺物も多く含むので断定し得ない。第2トレンチ周辺が微高地を呈し、この微高地が弥生時代あるいは少なくとも古墳時代以降の生活面であり、生活を営んだ微高地から自然条件や整地等の人為作用によって遺物が微高地周辺へ流出したと考えられる。

大小の溝を始めピット等各種の遺構が検出されたが、これらの遺構は各時期にわたっており、上述の予想を裏づけるものである。

時代の判明した遺構は、直径50cm、深さ50cmのピット(図版二十七)で、このピット中はきれいな川砂で充満され、底には古墳時代前期の土師器の小型鉢と小型壺(図版二十九-29,31)が置かれていた。もう一つは、長方形の落込みである。ここから中世のすすのついた土釜片(図版二十九-33)がまとまって礫とともに検出され、かまどを予想させる。他に時代は特定し得ないが、トレンチ中程の大きな溝からは、中世～近世の遺物が多数の礫とともに伴出された。

又多くの溝が検出されたが条理との関連については検討中である。

2-3 トレンチ

2-2トレンチと同じ状況である。地表下数10mの灰褐色包含層は、古墳時代から中、近世までの土器片が混存し、溝や土壇が多く検出されたが、いずれも時代や用途、機能を確定するに至らなかった。

3 トレンチ

遺跡の西端を確認するために設定したツボ掘りである。床土中とその下層から摩滅した小片が出土し、遺構は検出されなかった。だが、しかし一応遺物を包含する点は注意すべきである。

4 トレンチ

遺跡の北端を確認するために行ったツボ掘りである。例の灰褐色包含層は地表下約50cmから30cmの厚さで堆積し、その下層は黄褐色粘土の地山である。

この地山を切り込んでピットが掘られ、その埋土は黒色有機質土であり、弥生式土器片が検出された。寺門第2地区1-1トレンチとほぼ同じ状況である。

〔寺門第2地区の調査〕

寺門第1地区の丘陵が終り平野部がひろがるあたり、ちょうど槇尾川と府道と和気一父鬼線で挟まれた水田地帯が調査対象地域である。この附近の水田は条里制をよく残し注目される地域である。

未売収地と耕作地とさけてトレンチを設定した為発掘地域はやや北側に片寄ったが5ヶ所のトレンチと2ヶ所のツボ掘りを行った、トレンチ幅は約3mで、総延長は約360mである。

1-1 トレンチ

調査対象地域北端部に設定した3本のトレンチの内西端のトレンチである。

床土下に瓦器、須恵器、土師器等の古墳時代から中世までの遺物を包含した灰褐色土器が堆積し、その下に無遺物の砂層をはさんで黄褐色粘質土の地山が検出された。地山は地表約80cmで若干の不定形な黒色有機質土で埋ったピットが掘られている。この黒色土中より、摩滅して弥生時代後期か古墳時代前期か判別し難い土器片が出土した。しかし湧き水が多く精査し得なかった。

1-2 トレンチ

地表下約60cmより1-1トレンチで認めた灰褐色包含層が続いている。この包含層は東に行くに従って漸移的に下部が粘土質に変化し、遺物の量が少なくなる。又、地山からも遺構が検出されず、この包含層は時代の異なる遺物を含み、土器も小片ばかりで摩滅の著しいものもあり他所からの流入なり、整地等による攪乱が考えられる。

1-3 トレンチ

1-2 トレンチで検出された灰褐色包含層はやや埋設深度を深くして続いてくる。そしてトレンチ中程で灰褐色包含層の下層より1-1 トレンチではピット中で認められた黒色土が層をなして堆積するのが認められた。この黒色土層はトレンチ東端まで続くがレベルがしだいに高くなっていく。

黒色土層中には弥生時代後期、古墳時代前期の土器が含まれるが、細片が多く、他所からの流入と考えられる。とくにトレンチ東端部での地山が河原石のびっしりつまった砂礫層であることも考え合せ注目される。黒色土層下の地山には溝が2条検出されたが、黒色土層中より弥生時代石器(図版三十)を始め、6世紀初頭の須恵器まで出土しており時代は特定し得ない。

2-1 トレンチ

地層は1-3 トレンチと同じく地表下50~80cmで瓦器等の包含層、地表下1m前後に黒色包含層が検出された。瓦器等の包含層はトレンチ全域に及び、黒色土層は1-3 トレンチと交叉した地点より24mの所で終わっている。

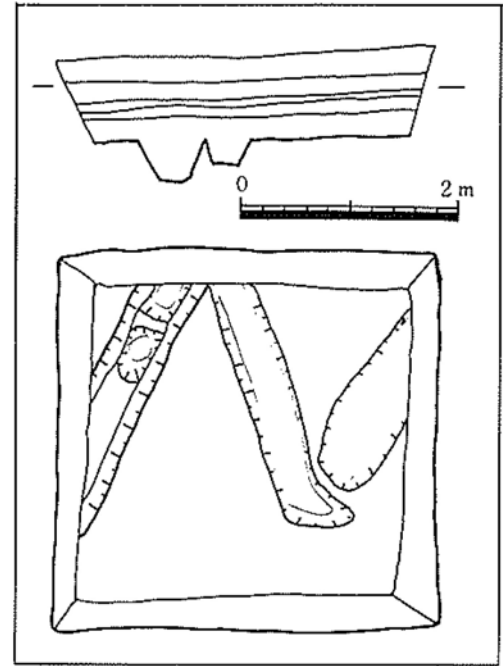
注目されるのは1-3 トレンチ南端部で、瓦器のプリミティブな層が認められ、それに伴う掘立柱の建築遺構が検出された。トレンチ内の柱穴だけではその規模を確定し得ないが、縦て3間の建造物が3軒確認された。柱間は約1m 80cm前後で、柱穴の掘方30cm前後、柱は10cm前後である。建て変えもなされており、焼土も10数cmの層をなして検出され、火災にあったことは確実である。時代は伴出する瓦器(図版二十九)から12世紀(白石太一郎氏の編年による)前後と推定される。

2-2 トレンチ

2-1 トレンチと通学路をはさんで南側に続くトレンチである。2-1 トレンチで検出された建築遺構群はこのトレンチでは認められなかったが、包含層は遺物の量が極めて少なくなるが連続する。最下層では6世紀の須恵器を出土するが、1-3 トレンチ層の黒色土層と対応するかは判然としない。

3 トレンチ

寺門第1地区の丘陵に近い、平野部の南端でツボ掘りを行った。丘陵に近いせいか地山は地表下40cmで検出され、包含層も須恵器、土師器、時期不詳の素焼き土器を含む黄褐色土層の一層だけである。遺構は伴わないが、周辺に遺構の遺存は十分考えられる。



第8図 寺門第2地区第4トレンチ
平面断面実測図

第4トレンチ

遺跡の西への広がりを知るために西端の中程に3×3mのトレンチを設定した。床土下は他のトレンチと同様に須恵器や中・近世の陶器片等の混存する包含層がある。この下層には2-1トレンチの建築遺構に対応すると思われる暗灰褐色土層がある。更にその下層には黒色有機質土が20cm堆積し、地山を切り込んだ溝を埋めている。溝はほとんど垂直に切り込んだ状況を良く観察し得る遺存度の良好な遺構であるが、黒色土中より遺構の時代を決定し得る土器片を得ることが出来なかった。従って1-3トレンチ最下層の黒色土と対応するか否か疑問を残す。いずれにしろこの周辺には何らかの遺構が遺存するとしてまちがいない。

〔府中地区の調査〕

横尾川の東岸にそって約500mほどが府中団地建設予定地である。建設予定地のほぼ中央を南北に約200mのトレンチを設定した。表土下はすべて砂礫層で、遺構・遺物は検出されなかった。この砂礫層は横尾川の旧流路であるか、

氾濫によってもたらされたものであろう。

予定地の北部は溜水が多く第1トレンチを延長し得なかったため北隅に3×3mのトレンチを設定した。第1トレンチと同じく表土下は砂礫層で、遺物等は検出されなかった。

〔Ⅳ〕ま と め

寺門第1地区

この地区では、旧石器時代（有舌尖頭器）、弥生時代（石鏃）の遺物と、古墳時代（古墳三基）と中世（土拵墓）の遺構が確認された。旧石器、弥生時代の遺物は遺構を伴わないが、弥生時代遺構は、古墳築造時に破壊されたものと考えられ、トレンチを設定しなかった山頂西側と東側山麓の平坦部は遺構の遺存する可能性がある。

この附近には1号墳の他に明瞭に墳丘と考えるものはないが、2号墳の西側に墳丘を流出してしまった古墳が存在する可能性がある。又今回調査した三基の古墳は保在協議の結論を持つため墳丘部の調査はトレンチ掘りに止め主体部は現状のまま埋め戻した。中世墳墓については山頂部周辺に広がっている。

従って寺門第1地区では、開発工事が行なわれるとすれば山頂部周辺の中世墳墓と山頂部西側の尾根と東側平坦部で古墳もしくは弥生時代遺構の全面的な発掘調査が必要である。

寺門第2地区

建設予定地全域で遺物が検出された。遺物は弥生時代中期から近世にまで及んでいるが、特に中世の瓦器等が最も多く、ほぼ全域から出土し、次いで弥生時代後期、古墳時代の土師器（古式土師）や須恵器が局所的に集中して出土する。

奈良・平安時代遺物は少量であり、弥生時代中期はごく数点確認されただけである。特に精査を要するのは第3トレンチ周辺、第2-1トレンチの12世紀

の建築遺構群、6世紀以前の包含層の拡がる第2-1と第1-3トレンチの交叉した地点を中心とする地域である。

又、この地域は条里の良く遺存するところであり、条里に伴う遺構の調査が必要である。

今福地区

この地域も全域で遺物が検出された。遺物は弥生時代中期から近世に及んでいる。遺構は主に建設予定地の中央部微高地状を呈する地域2-1,3トレンチ周辺部に集中している様子が窺われる。微高地状を呈するため居住適地として選ばれたのであろう。しかし後の時代になっていくぶんか削平された可能性がある。

他には、弥生時代後期の包含層の拡がる1-2トレンチ周辺、第4トレンチの附近も精査を要する。又寺門第2地区と同様条理制の遺存がよく、条理の調査は精査を要する。

府中地区

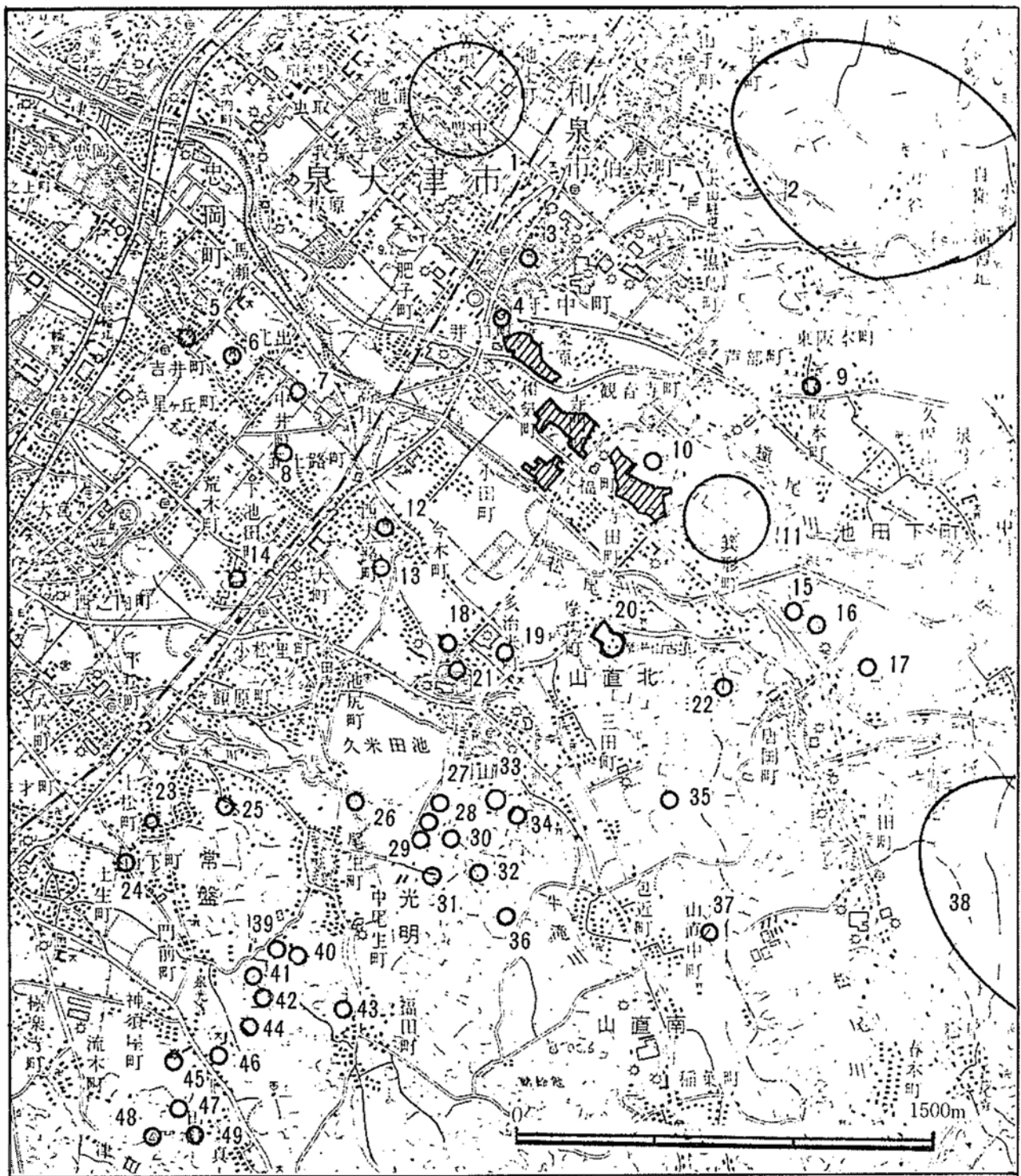
遺構、遺物はまったく検出されなかった。予備踏査の際に須恵器片を採集したが、これは畑をする為に他所から耕土を入れた際、その土に含まれていたものであろう。

図

版

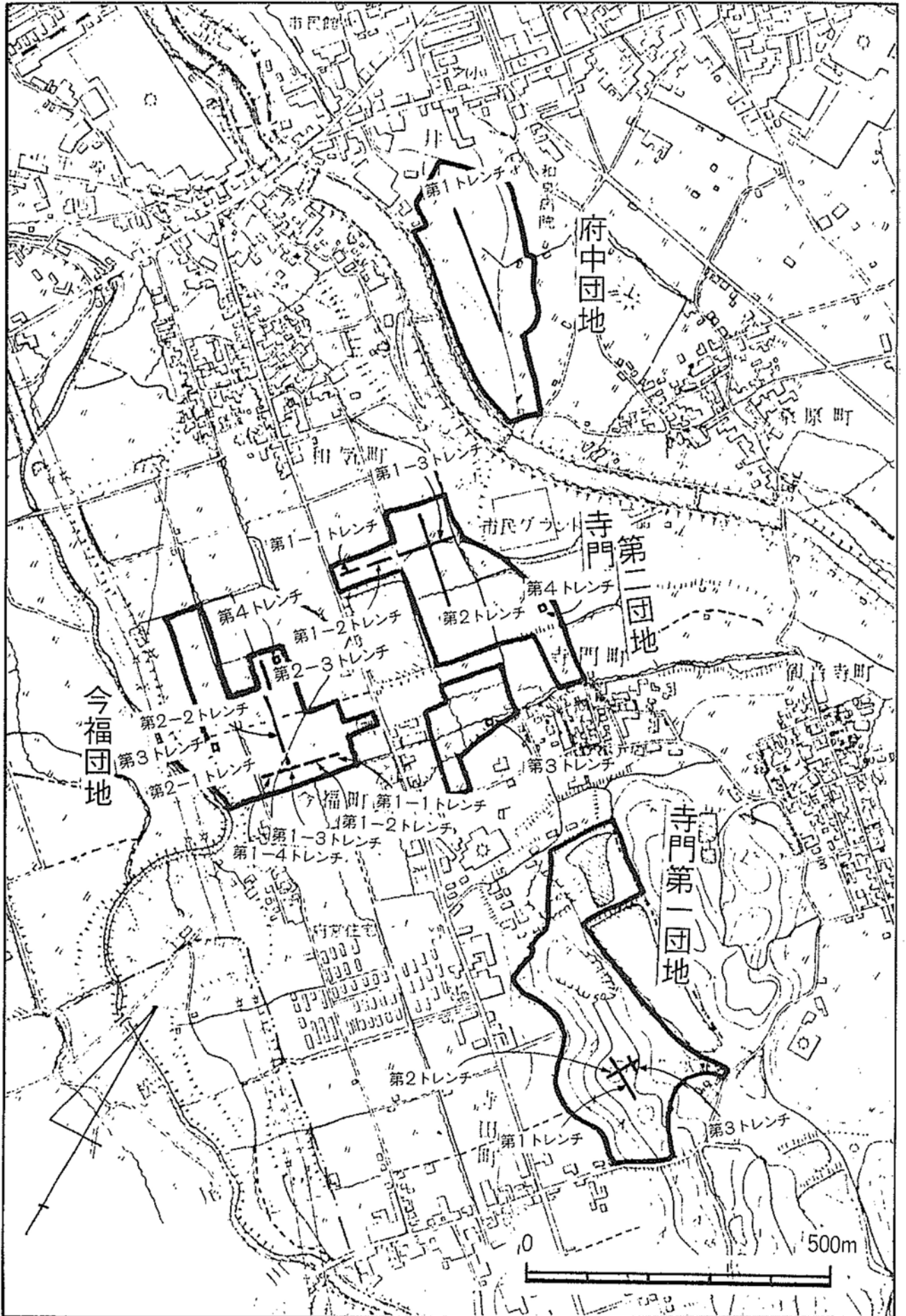


寺門第1地点1号墳第2トレンチ出土礫



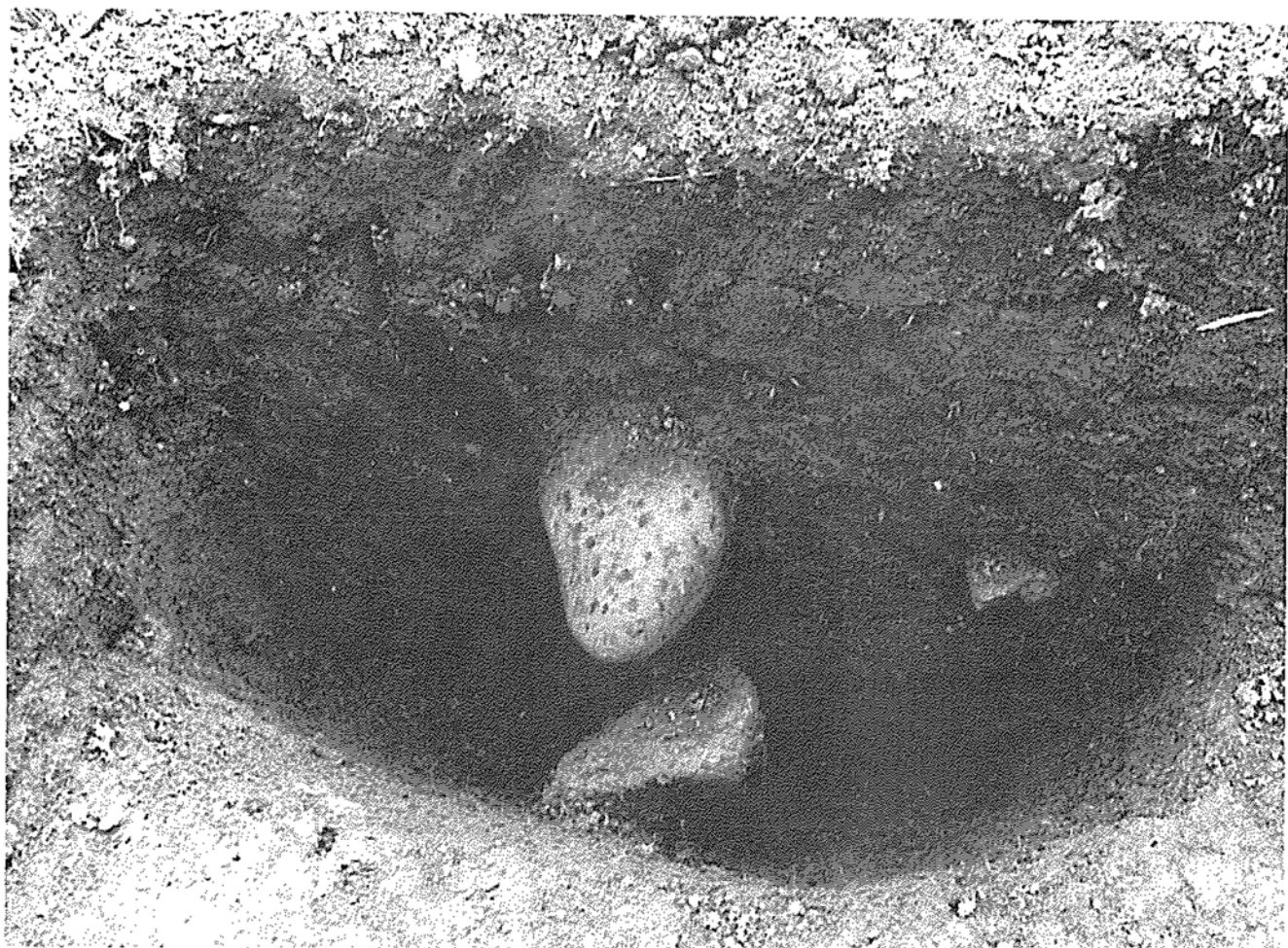
- | | | |
|-----------|-------------|-----------------|
| 1 池上曾根遺跡 | 18 田治米遺跡 | 35 三田遺跡 |
| 2 信太山古墳群 | 19 田治米宮内遺跡 | 36 お立場古墳 |
| 3 和泉国府跡 | 20 摩湯山古墳 | 37 儀手山古墳 |
| 4 和泉寺跡 | 21 田治米廃寺 | 38 泉北丘陵谷山池周辺窯跡群 |
| 5 吉井上品廃寺跡 | 22 マイ山古墳 | 39 尾崎遺跡 |
| 6 夜疑廃寺跡 | 23 狐塚古墳 | 40 琴山遺跡 |
| 7 高月寺跡 | 24 土生遺跡 | 41 ちご池東遺跡 |
| 8 箕土路遺跡 | 25 武達廃寺跡 | 42 神明山古墳 |
| 9 禪寂寺跡 | 26 馬塚古墳 | 43 たな川塚古墳 |
| 10 観音寺城跡 | 27 松尾池尻埴輪窯跡 | 44 三本松下遺跡 |
| 11 観音寺山遺跡 | 28 岡山ハツ川遺跡 | 45 八代寸廃寺跡 |
| 12 今木廃寺 | 29 重ノ原古墳 | 46 三合塚古墳 |
| 13 丸山古墳 | 30 小金塚古墳 | 47 義大塚古墳 |
| 14 小松里廃寺跡 | 31 赤山古墳 | 48 牛神古墳 |
| 15 池田山遺跡 | 32 どぞく古墳 | 49 大山大塚古墳 |
| 16 池田山古墳群 | 33 西山遺跡 | |
| 17 明神原古墳群 | 34 西山古墳 | |

図版二 調査地内トレンチ設定位置図

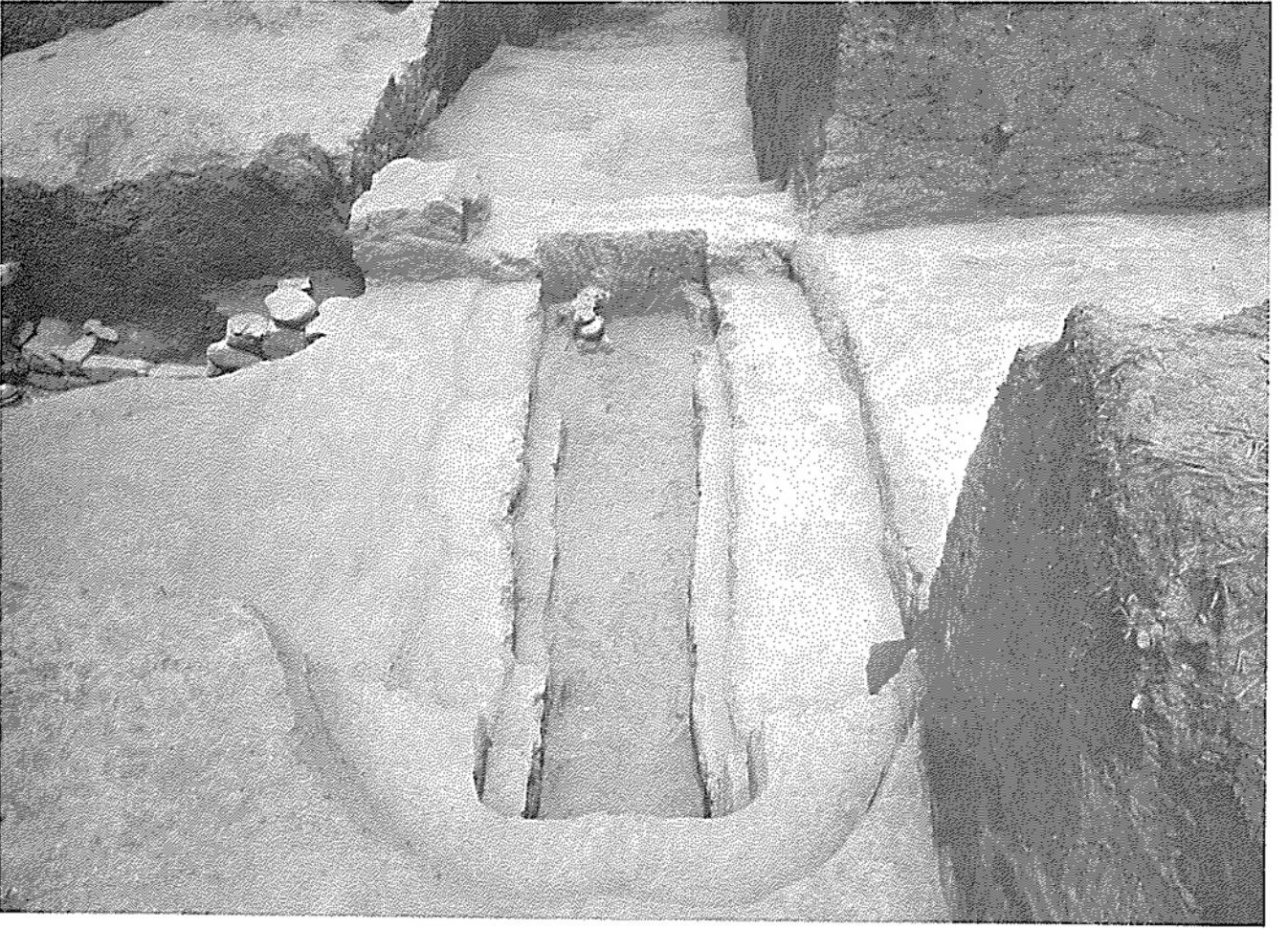




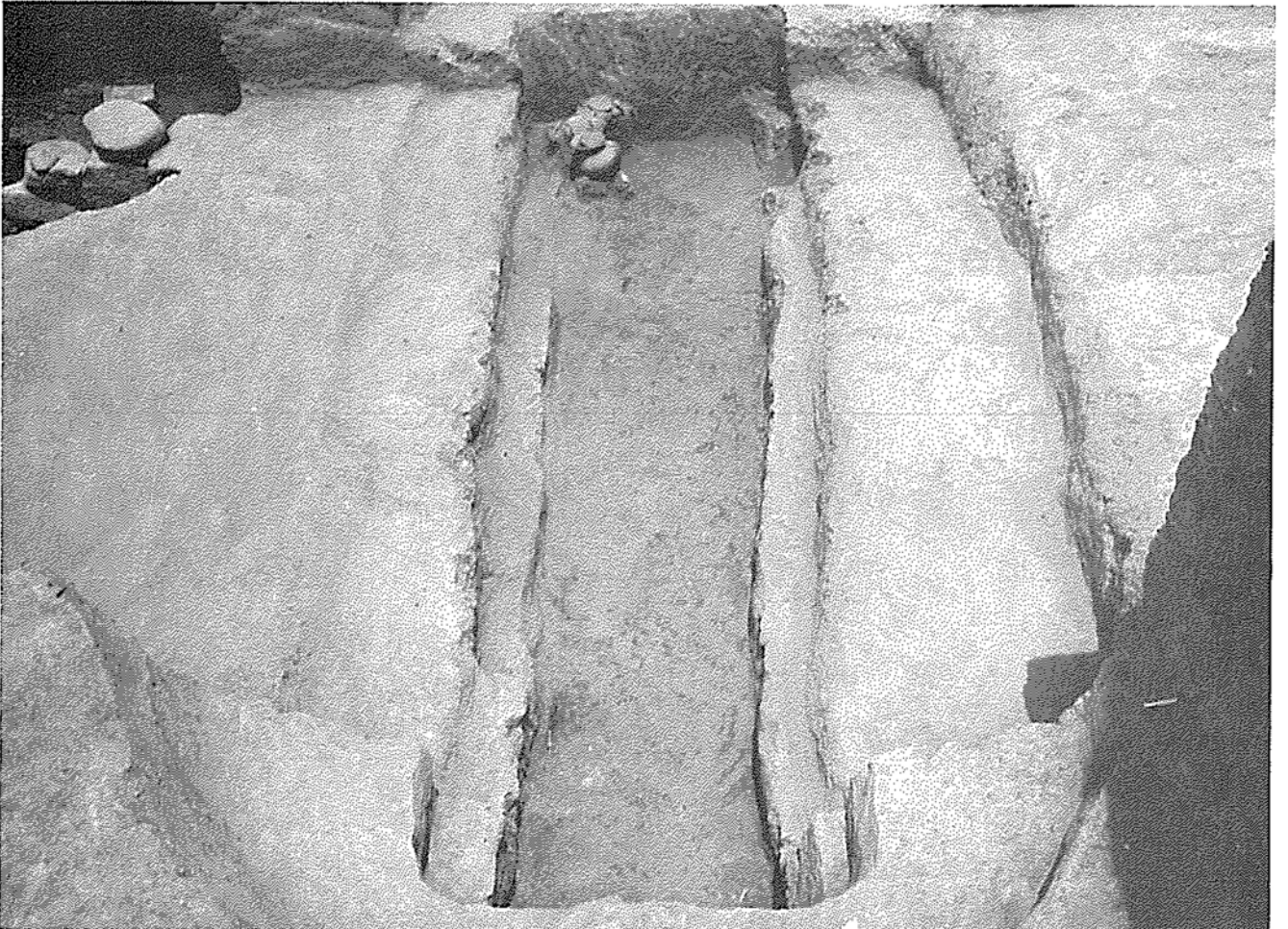
寺門1号墳、2号墳遠景



中世墳墓



1号墳第1主体(木棺直葬)木棺部及び副葬品



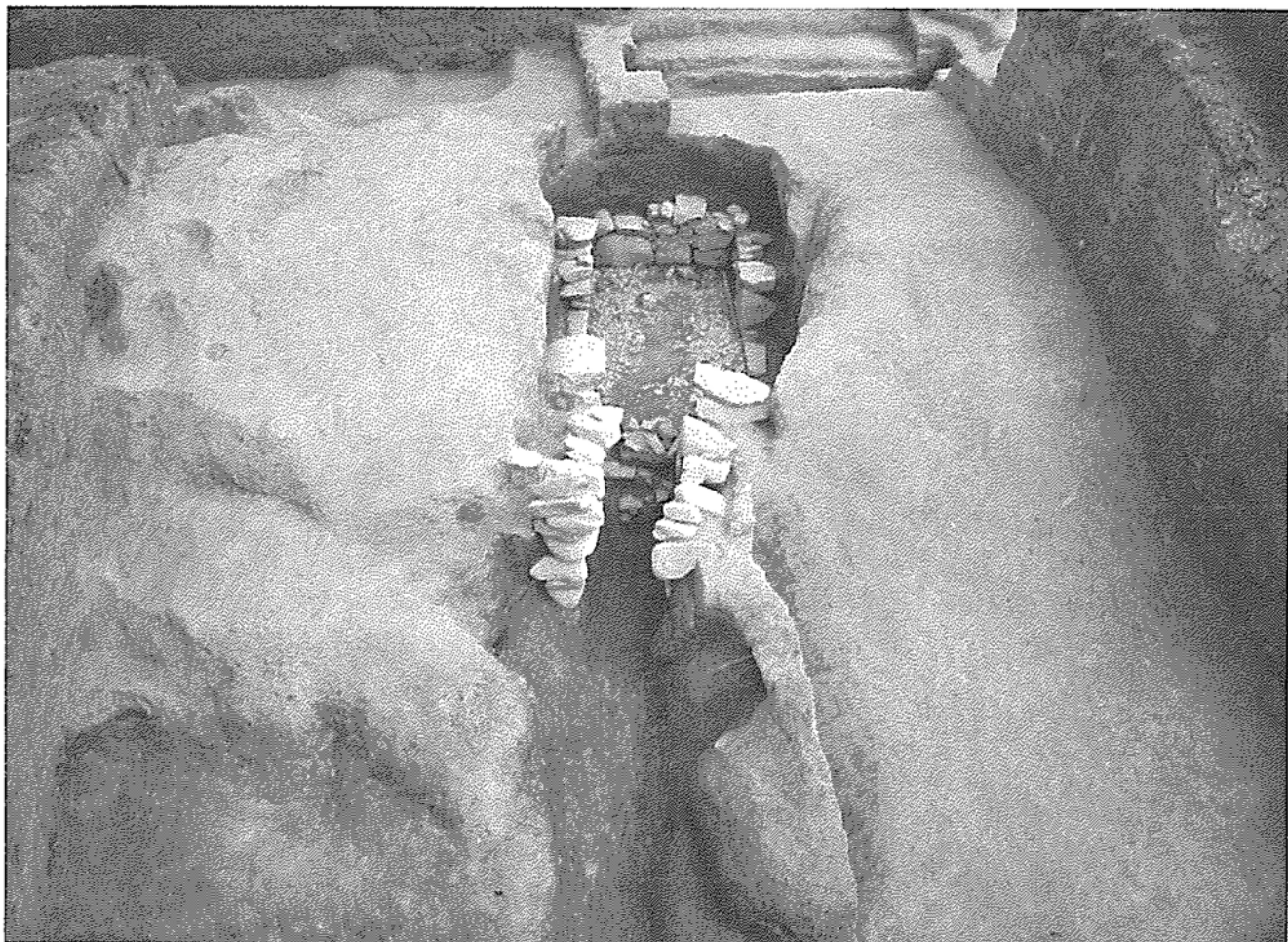
同上



1号墳第1主体(木棺直葬)木棺部外辺



1号墳第1主体(木棺直葬)掘方



1号墳第2主体(横穴式石室)第2次床面と石室全景



1号墳第2主体(横穴式石室)第1次床面と石室全景



1号墳第2主体(横穴式石室)副葬品出土状況



同上



一号墳第一主体(木棺直葬)及び第二主体(横穴式石室)



2号墳主体部



2-2トレンチ全景



1-3トレンチ全景



2-1トレンチ中世建築遺構



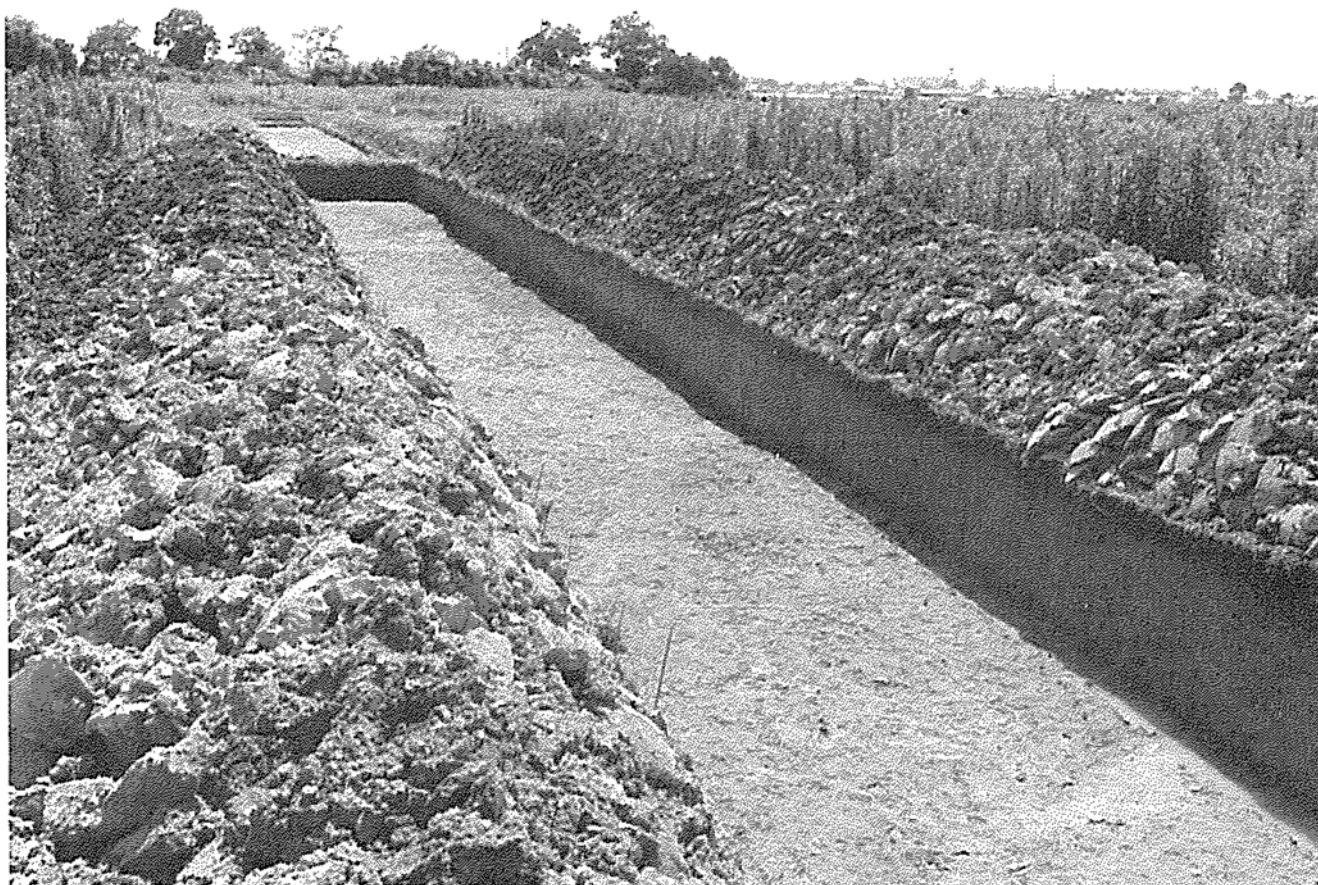
2-1トレンチ最終遺構面



2-1トレンチ中世建築遺構土器出土状態



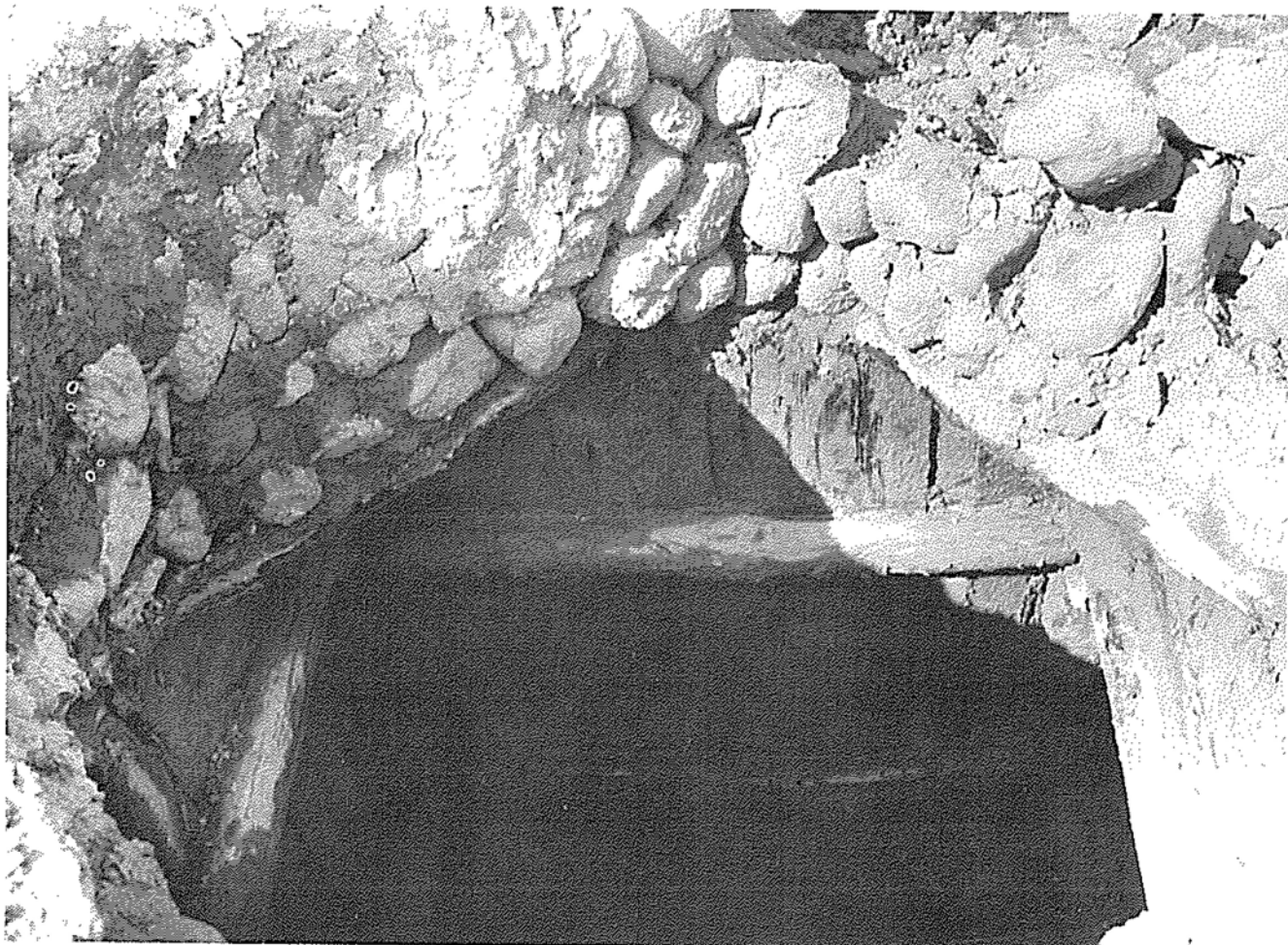
第4トレンチ全景



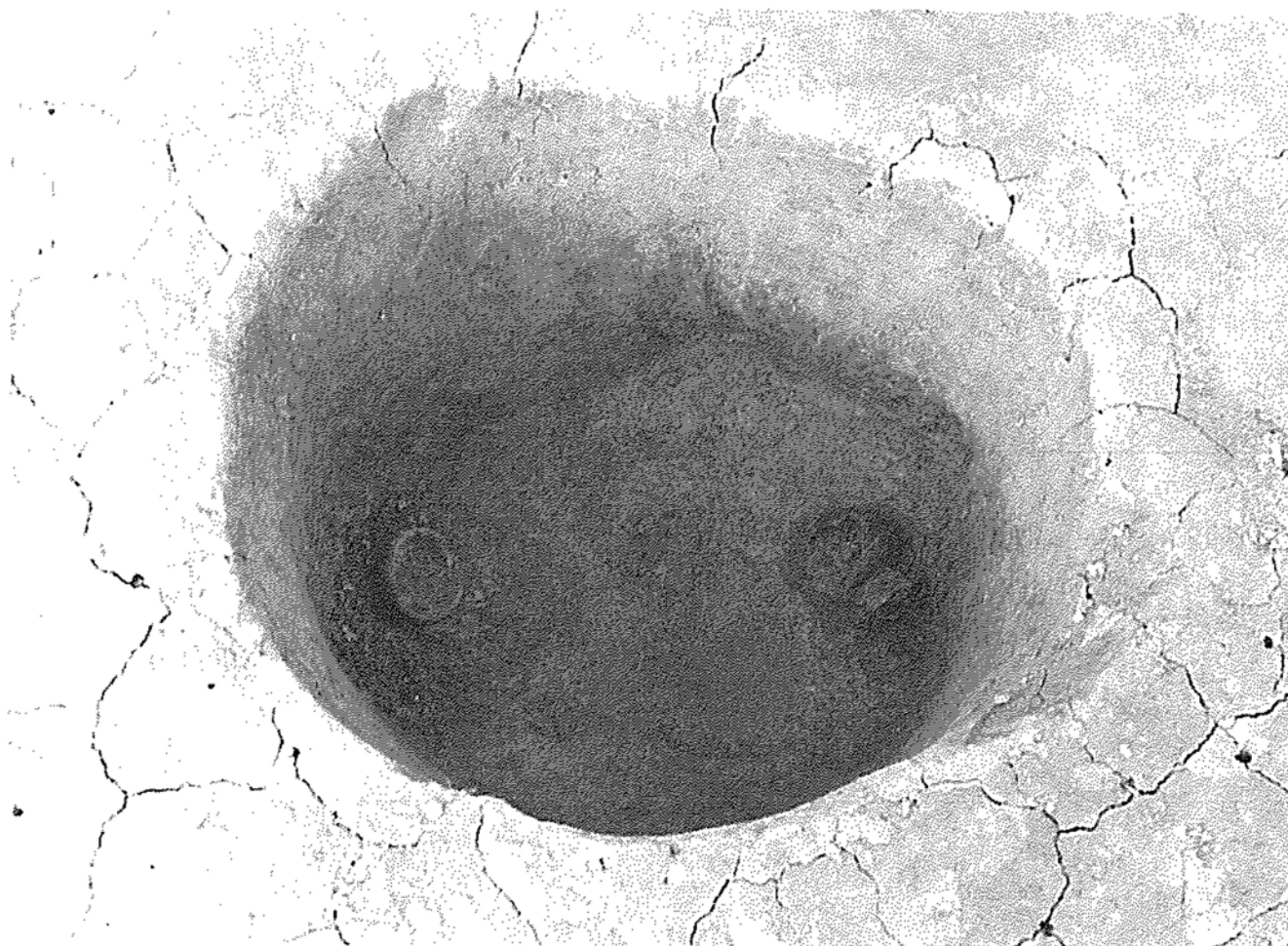
1-3、1-4トレンチ



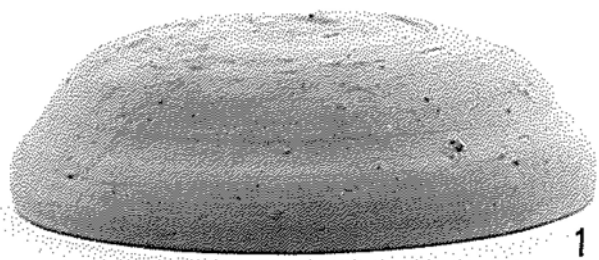
1-3トレンチ



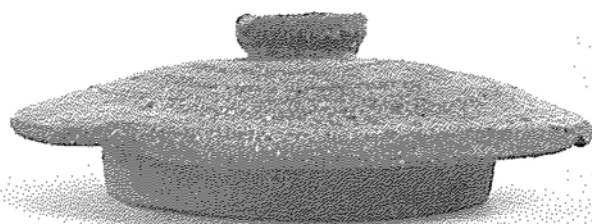
1-3トレンチ近世井戸遺構



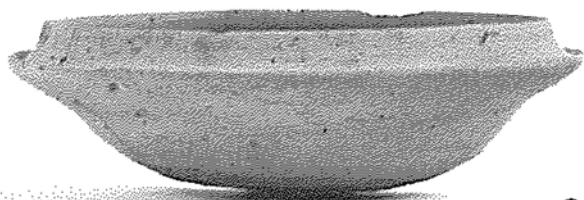
2-2トレンチ古墳時代ピット、土師器出土状態



1



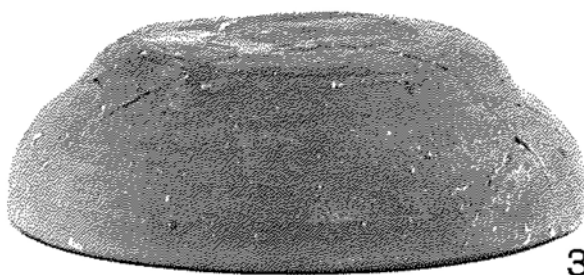
6



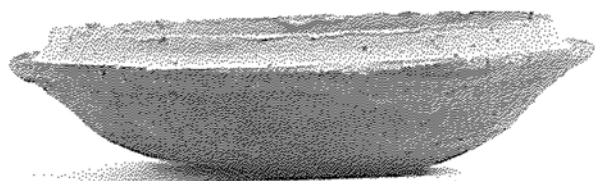
2



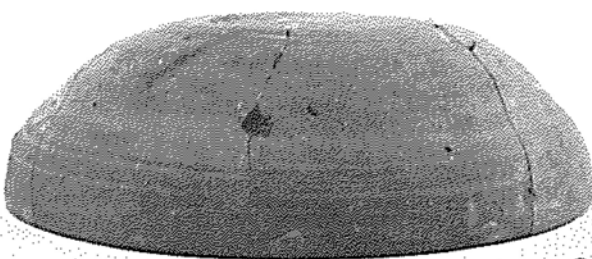
7



3



4



8



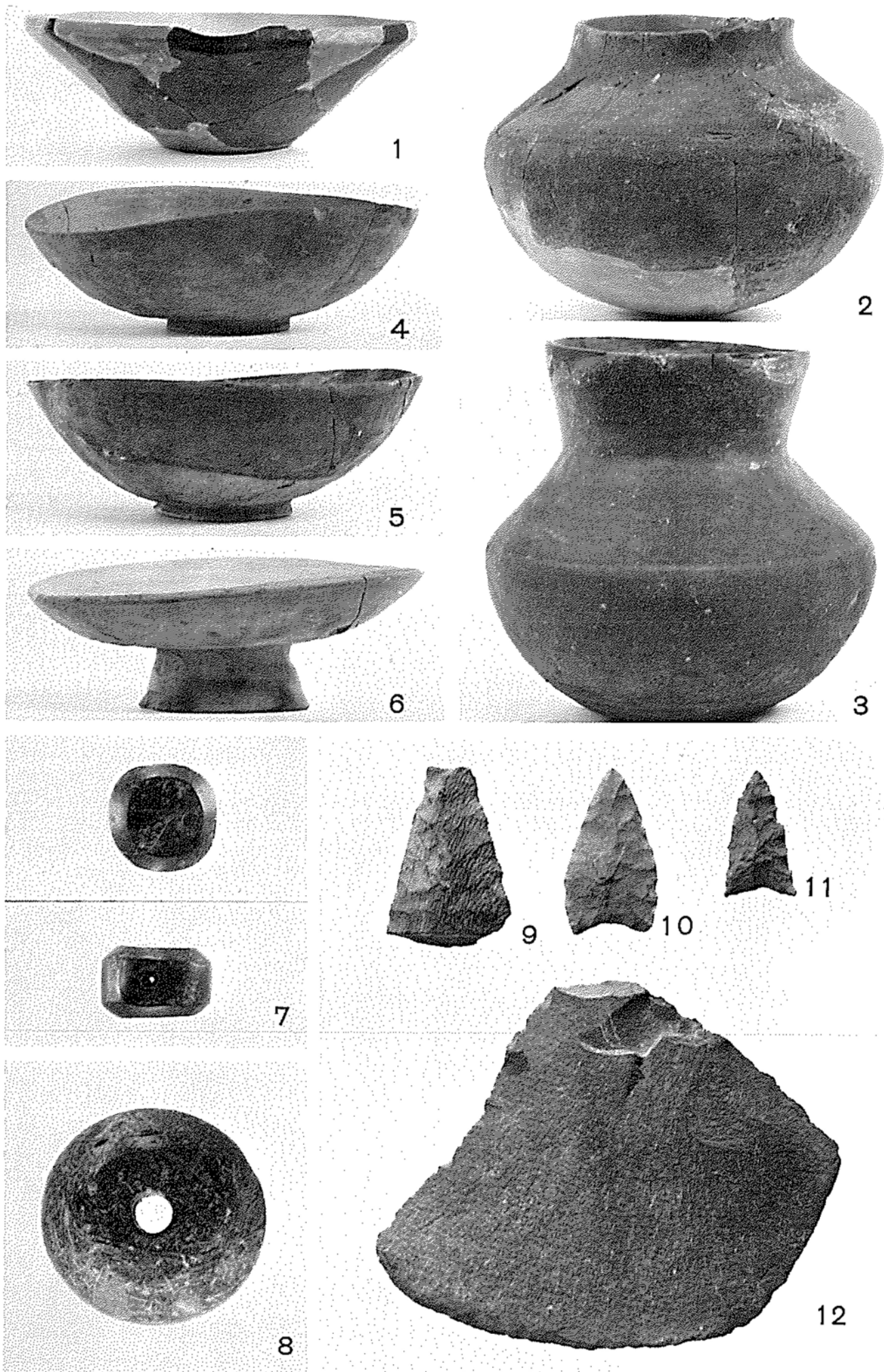
5



9

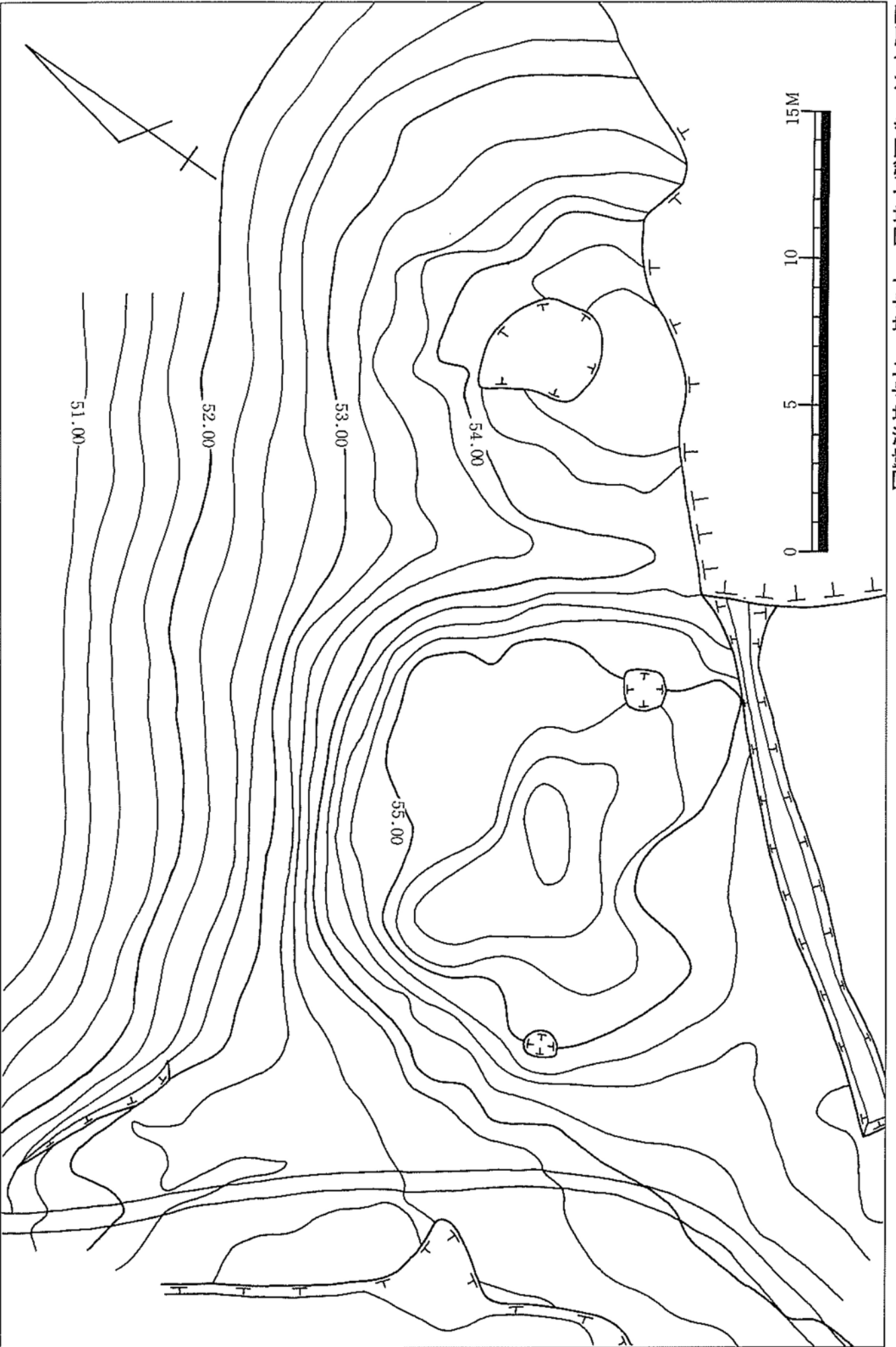
第2主体石室内遺物(1~7)

第1主体木棺内遺物(8~9)

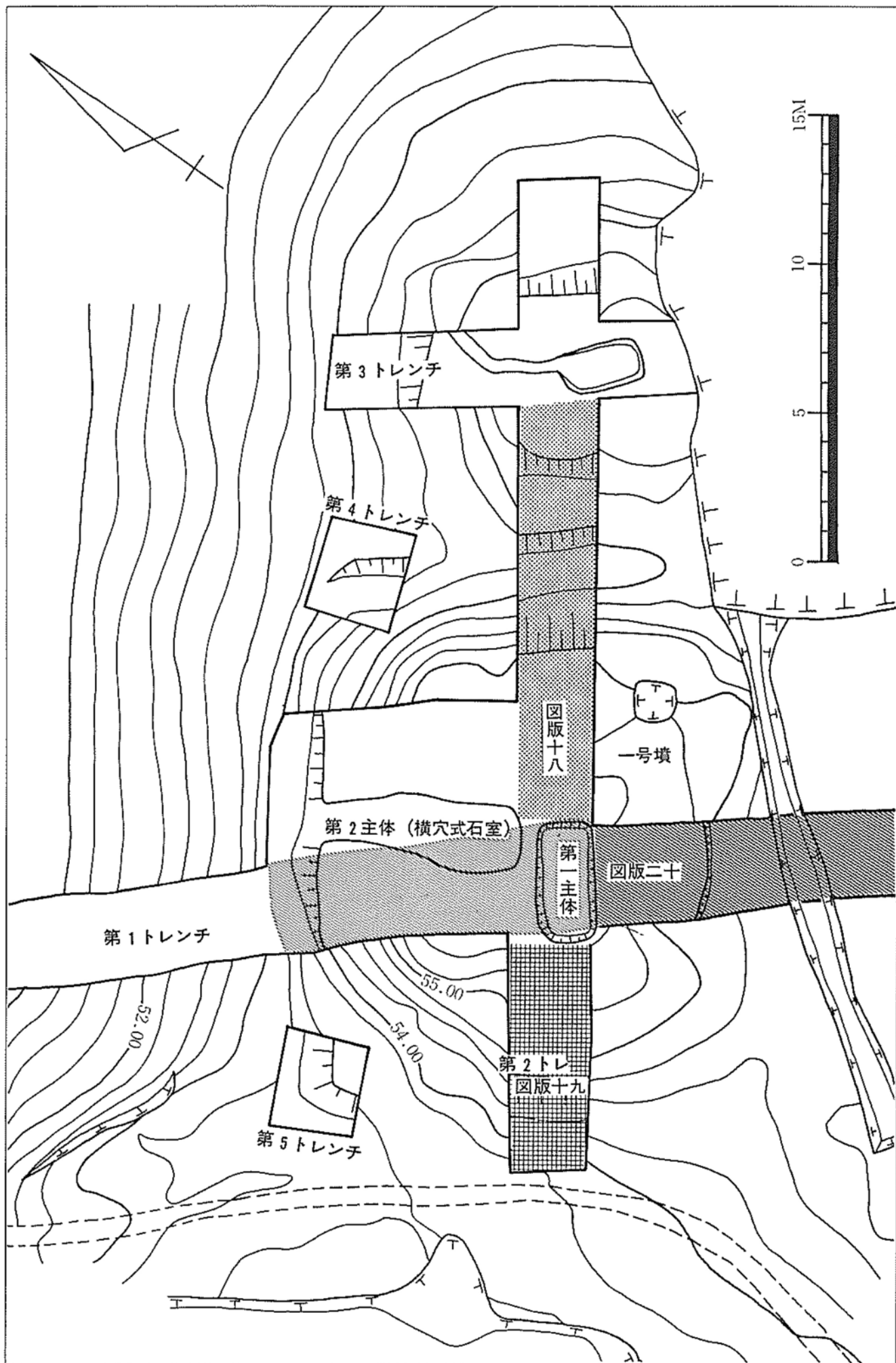


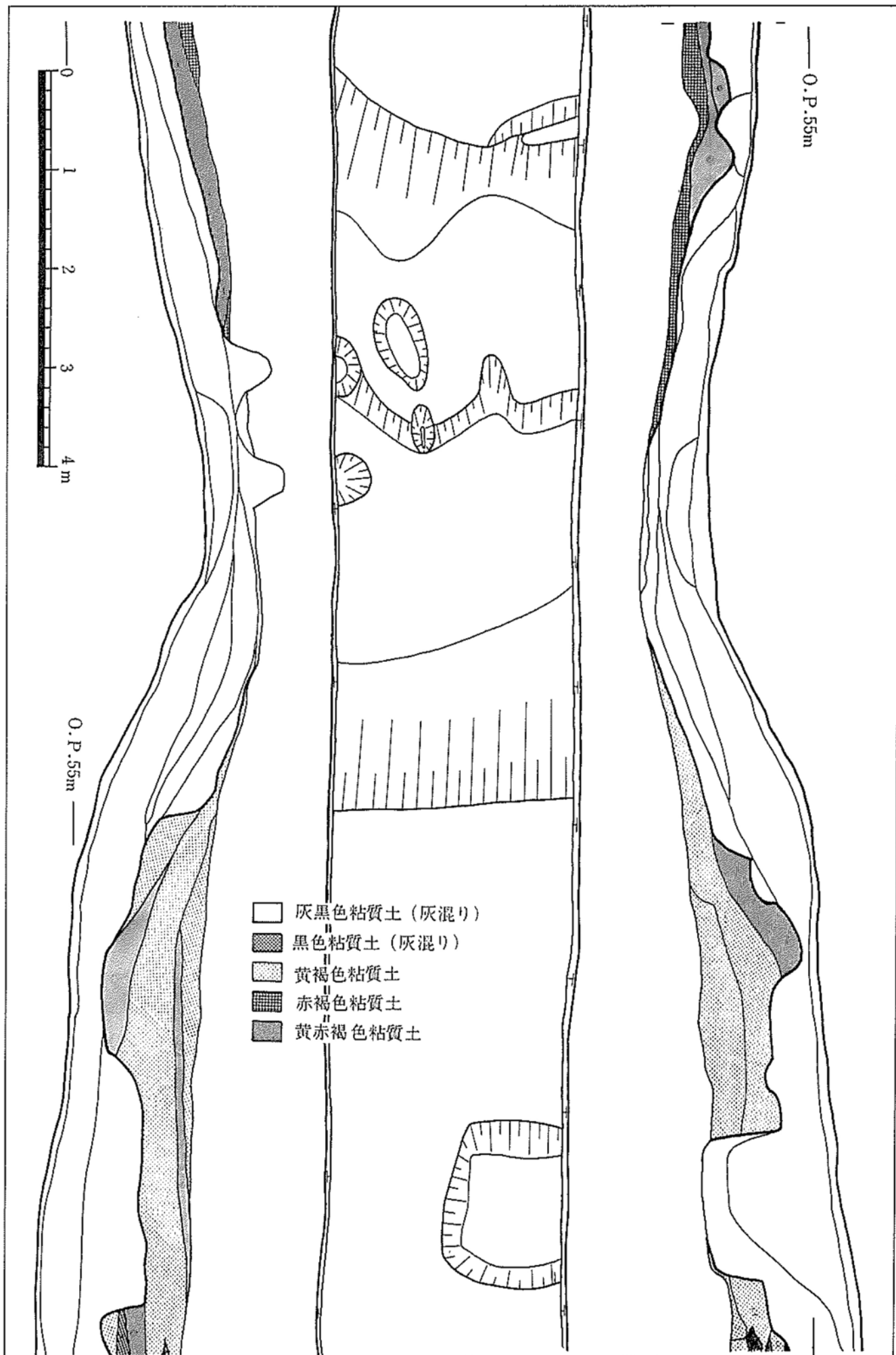
寺門第1地区出土遺物(1~3、7、9、10)寺門第2地区出土遺物(4~6、8、11~13)

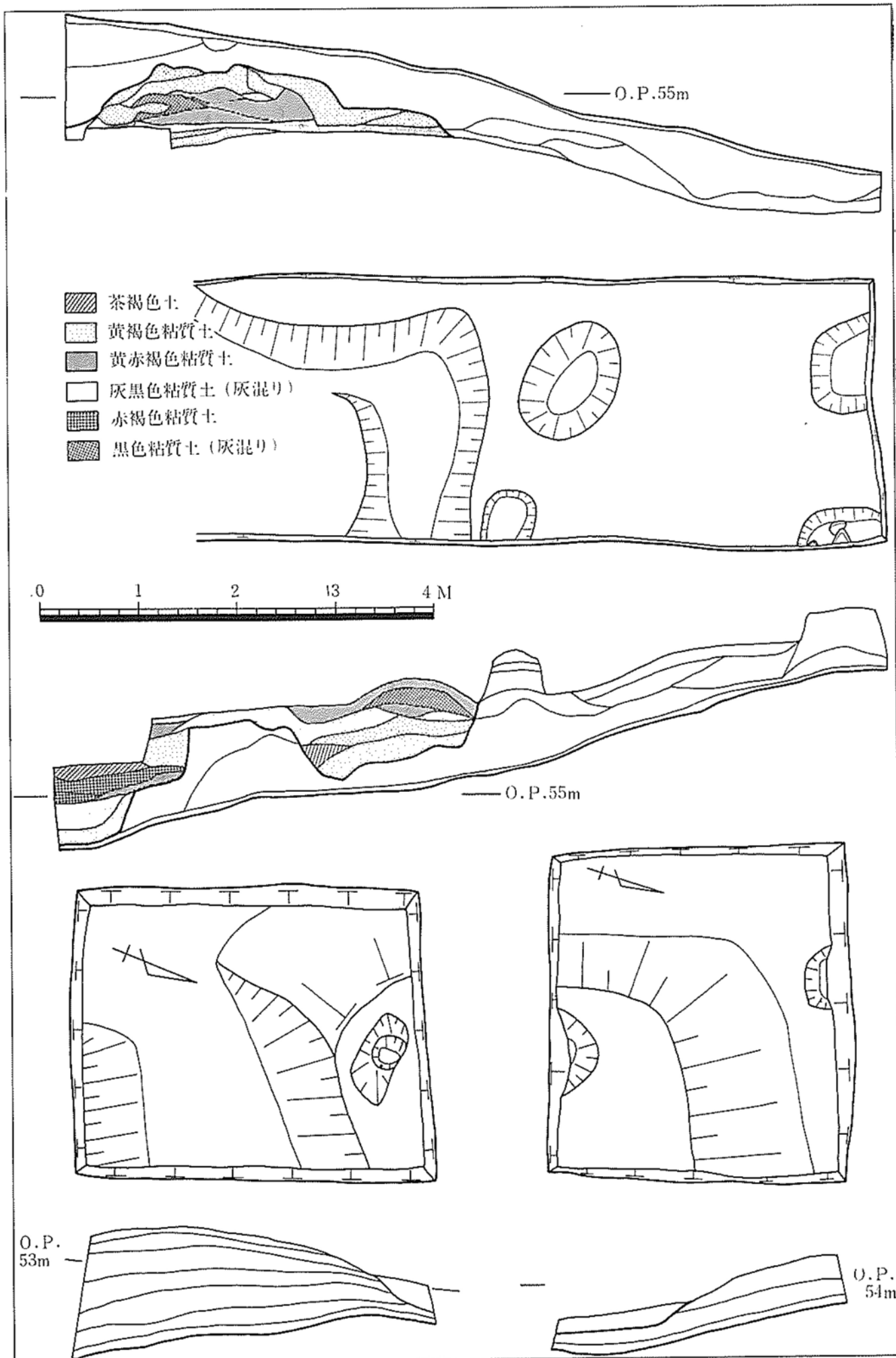
図版十六 寺門第一地区、一号墳、二号墳測量図

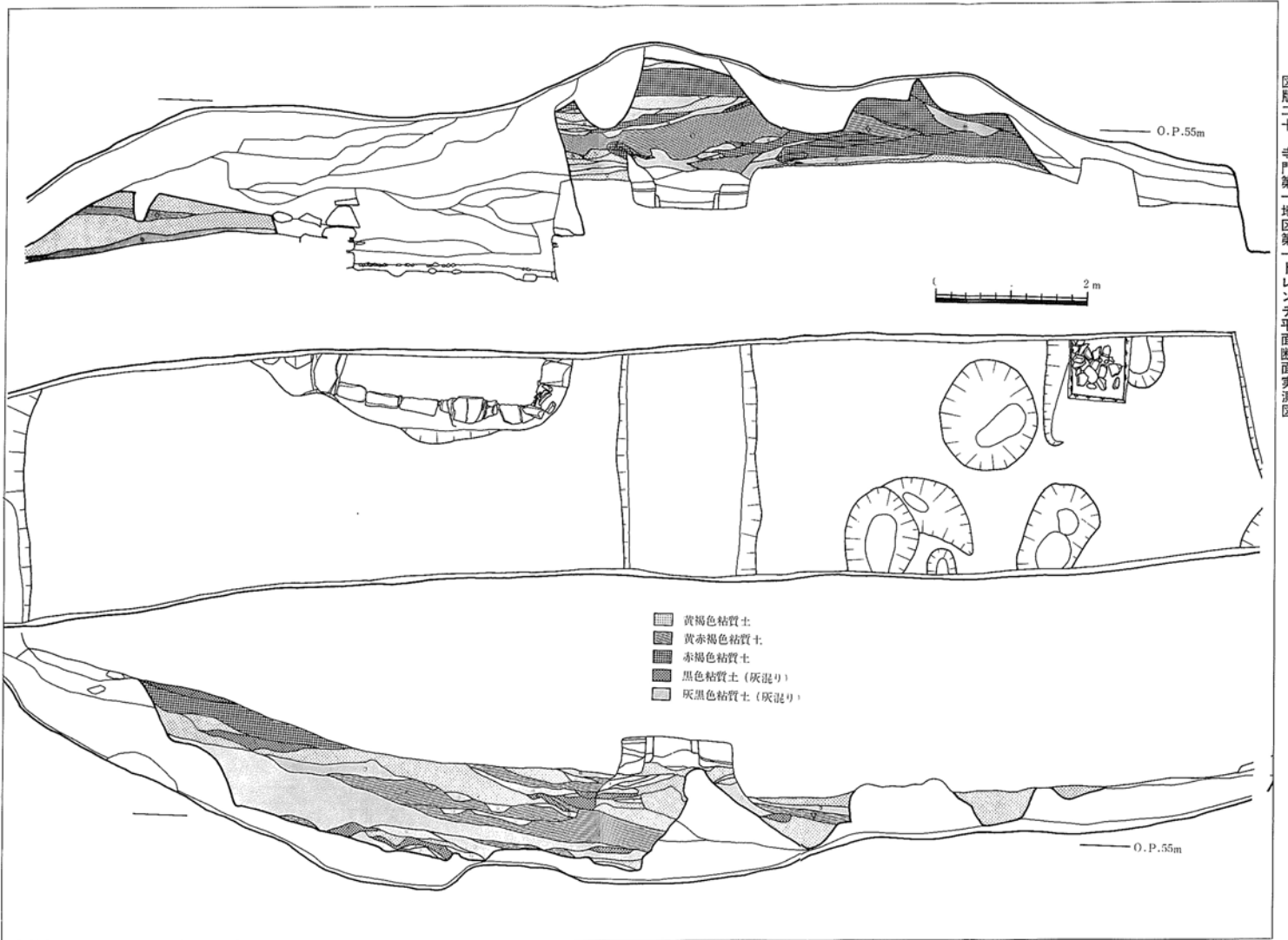


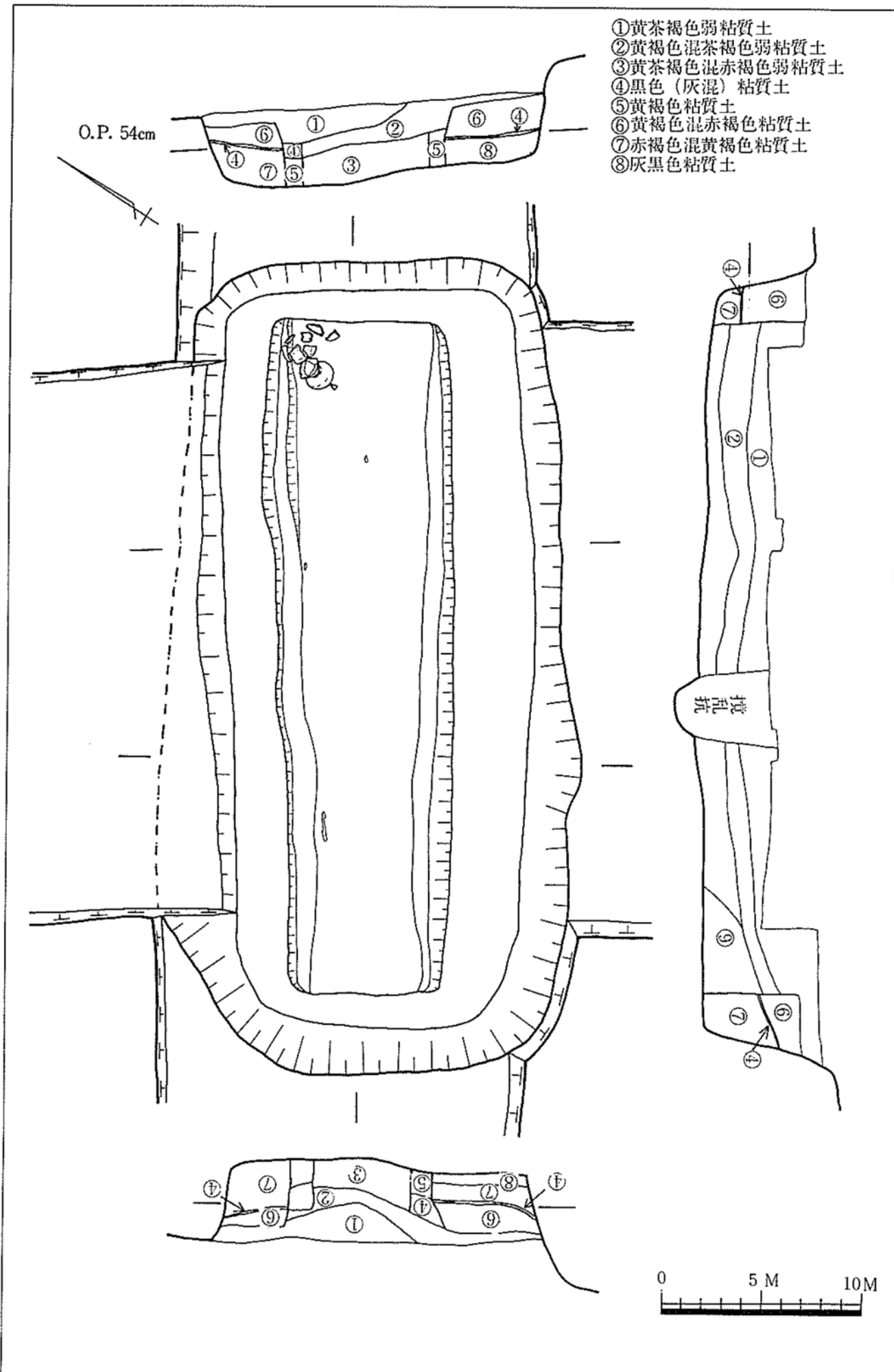
図版十七 寺門第一地区一号墳、二号墳トレンチ位置図

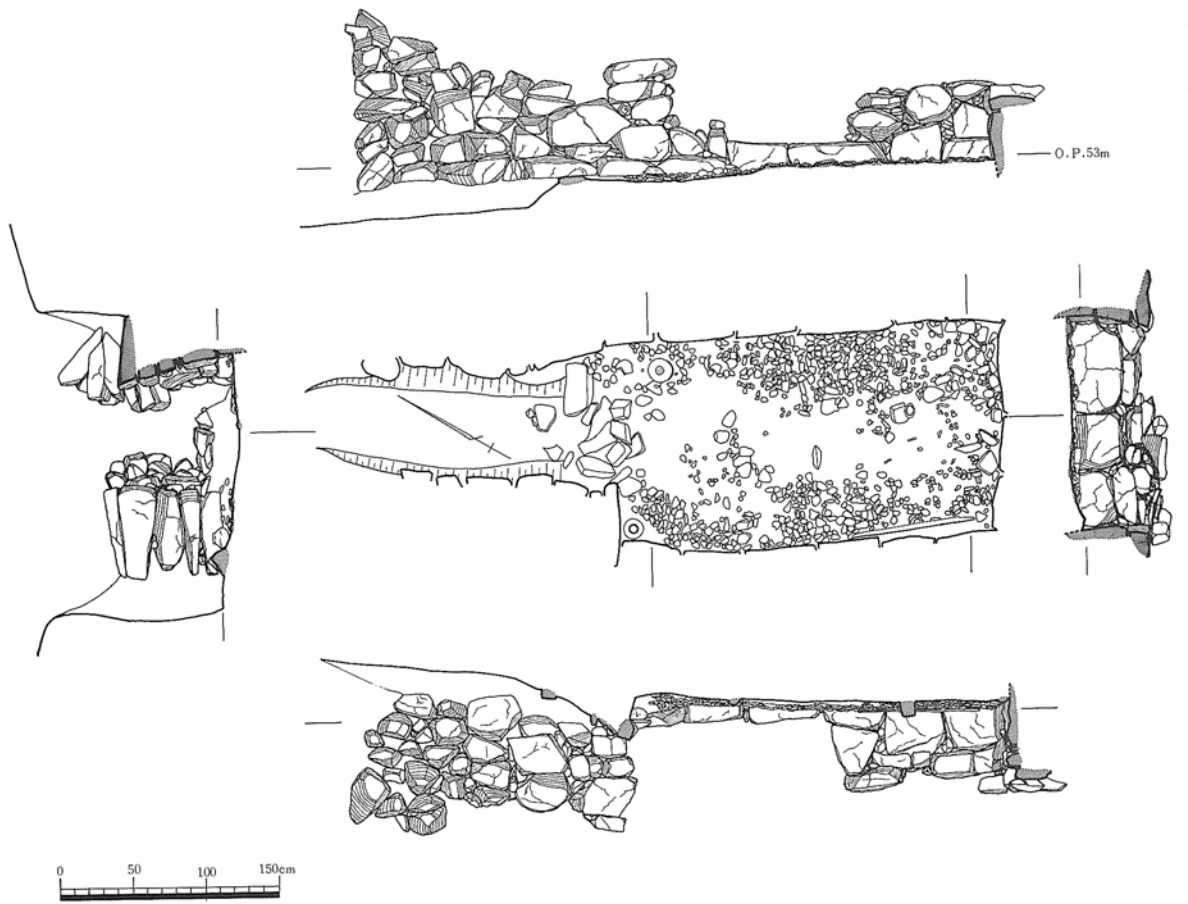




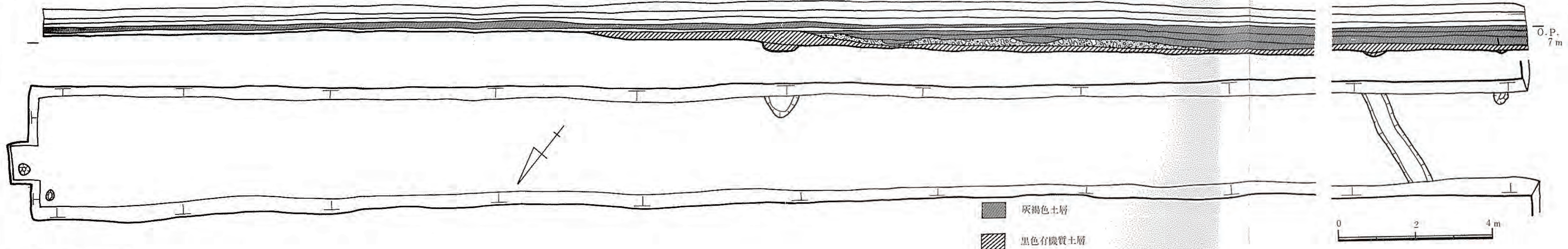




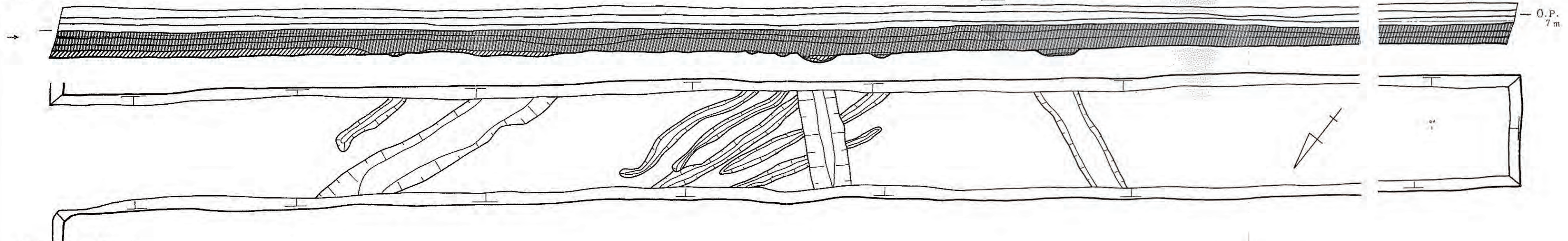




寺門第2地区 1-3トレンチ



寺門第2地区 1-2トレンチ

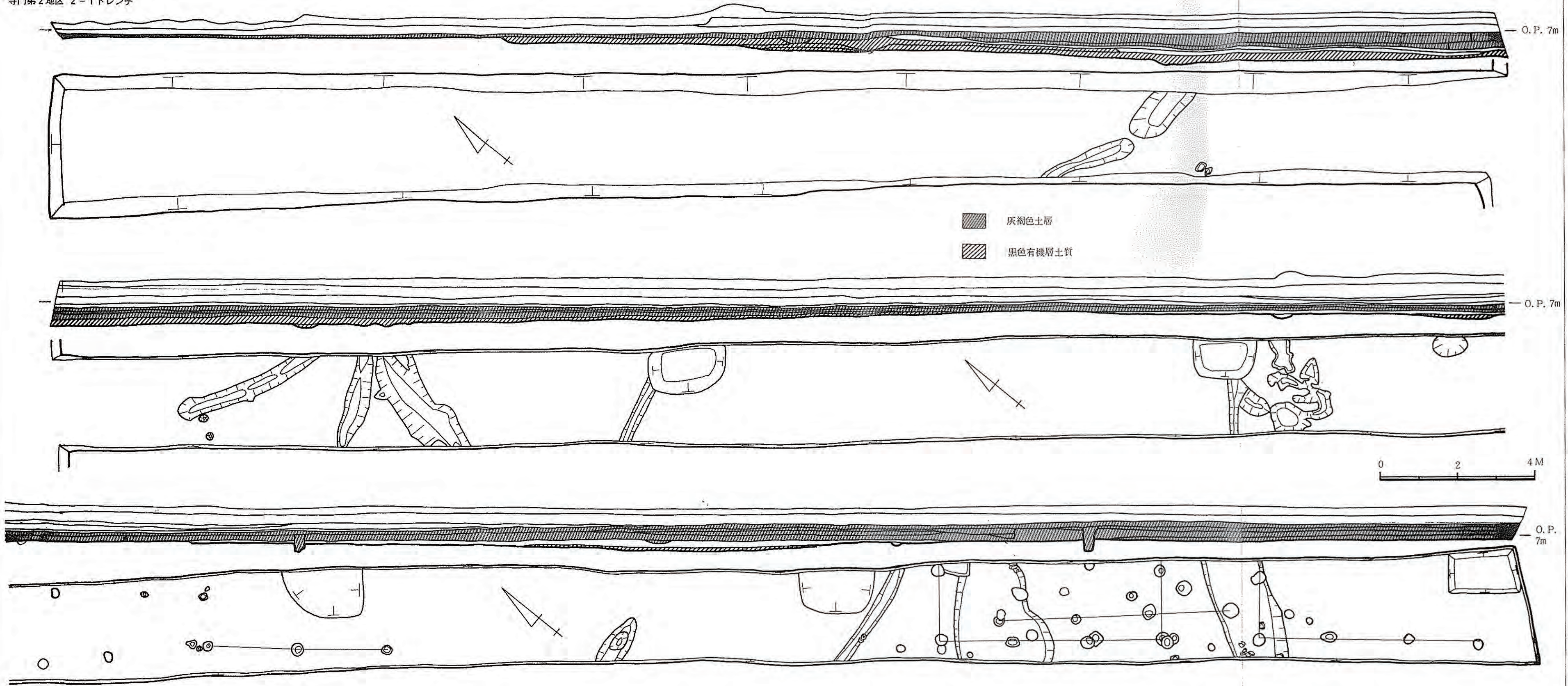


寺門第2地区 1-2トレンチ



寺門第2地区 1-1トレンチ





■ 灰褐色土層
 ▨ 黒色有機層土質

0 2 4 M

O.P. 7m

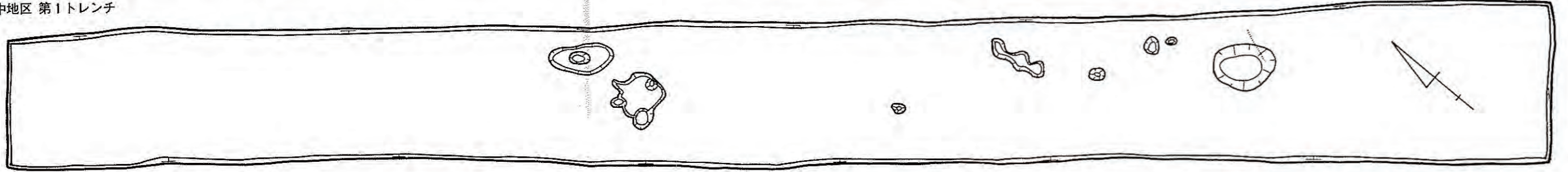
O.P. 7m

O.P. 7m

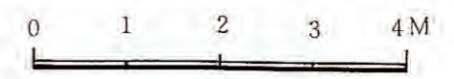
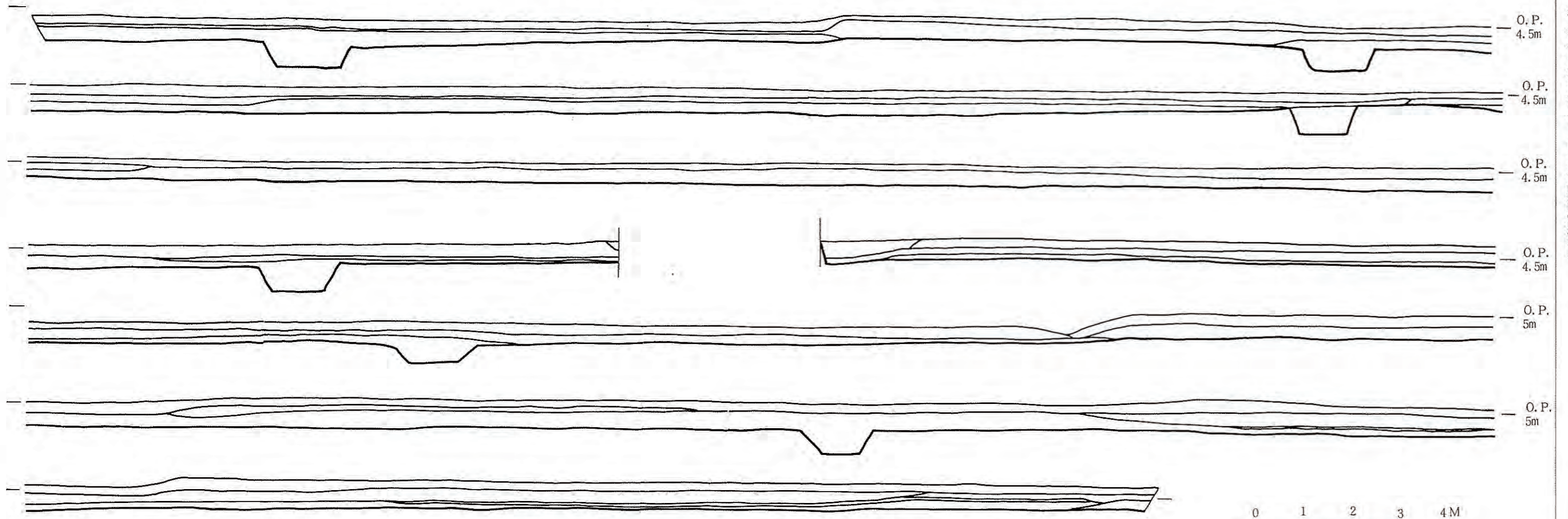
寺門第2地区 2-2トレンチ



和泉府中地区 第1トレンチ



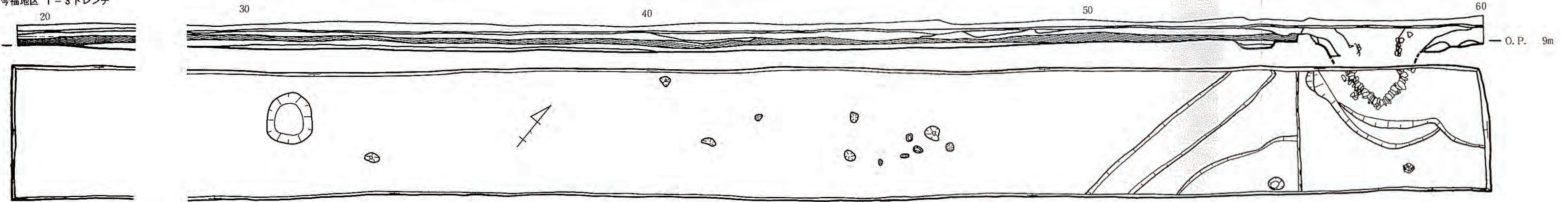
■ 灰褐色土層



今福地区 1-4トレンチ



今福地区 1-3トレンチ



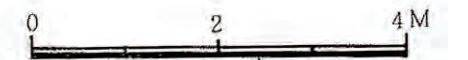
今福地区 1-2トレンチ



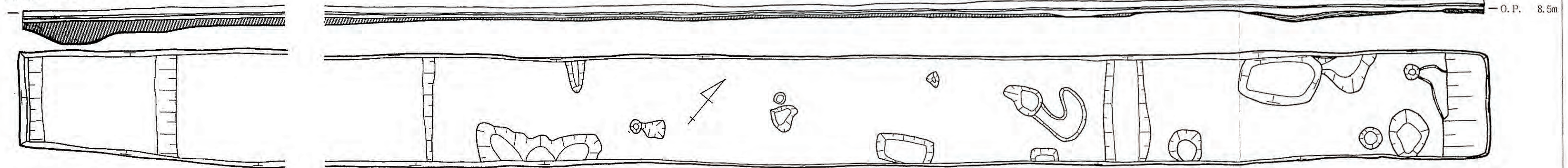
今福地区 1-1トレンチ

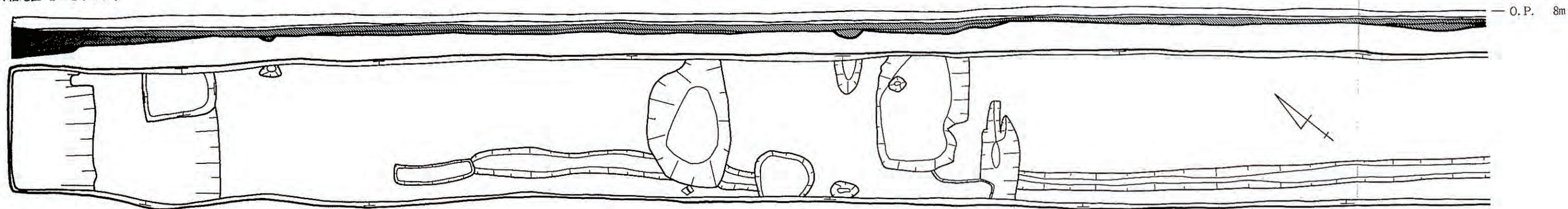


■ 灰褐色土層
▨ 黒色有機質土

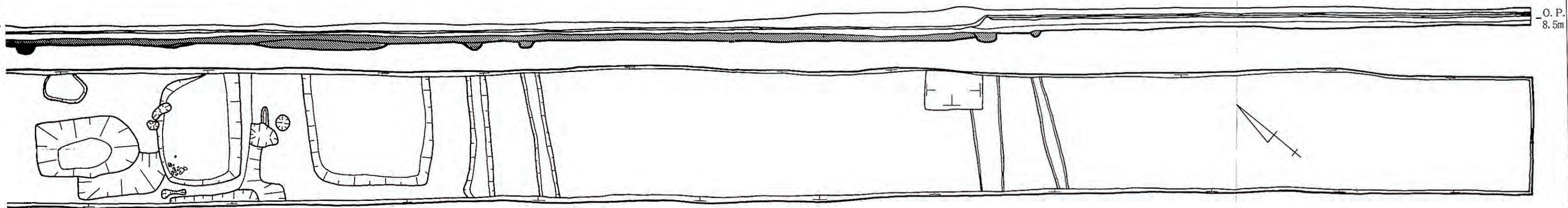
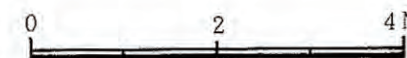
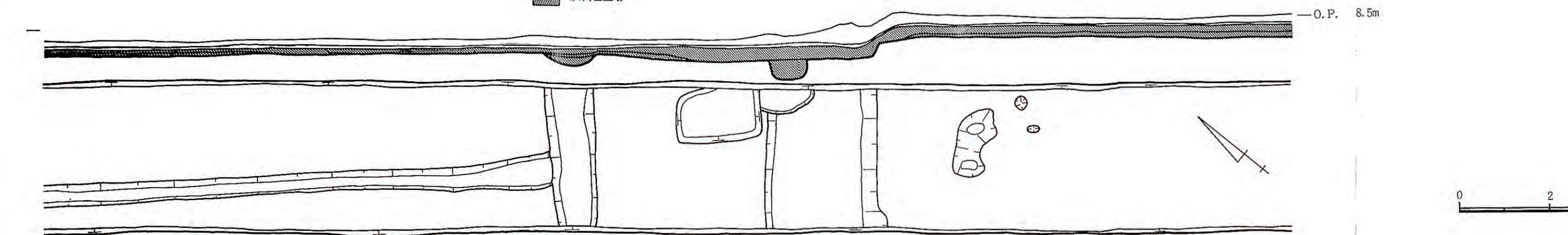


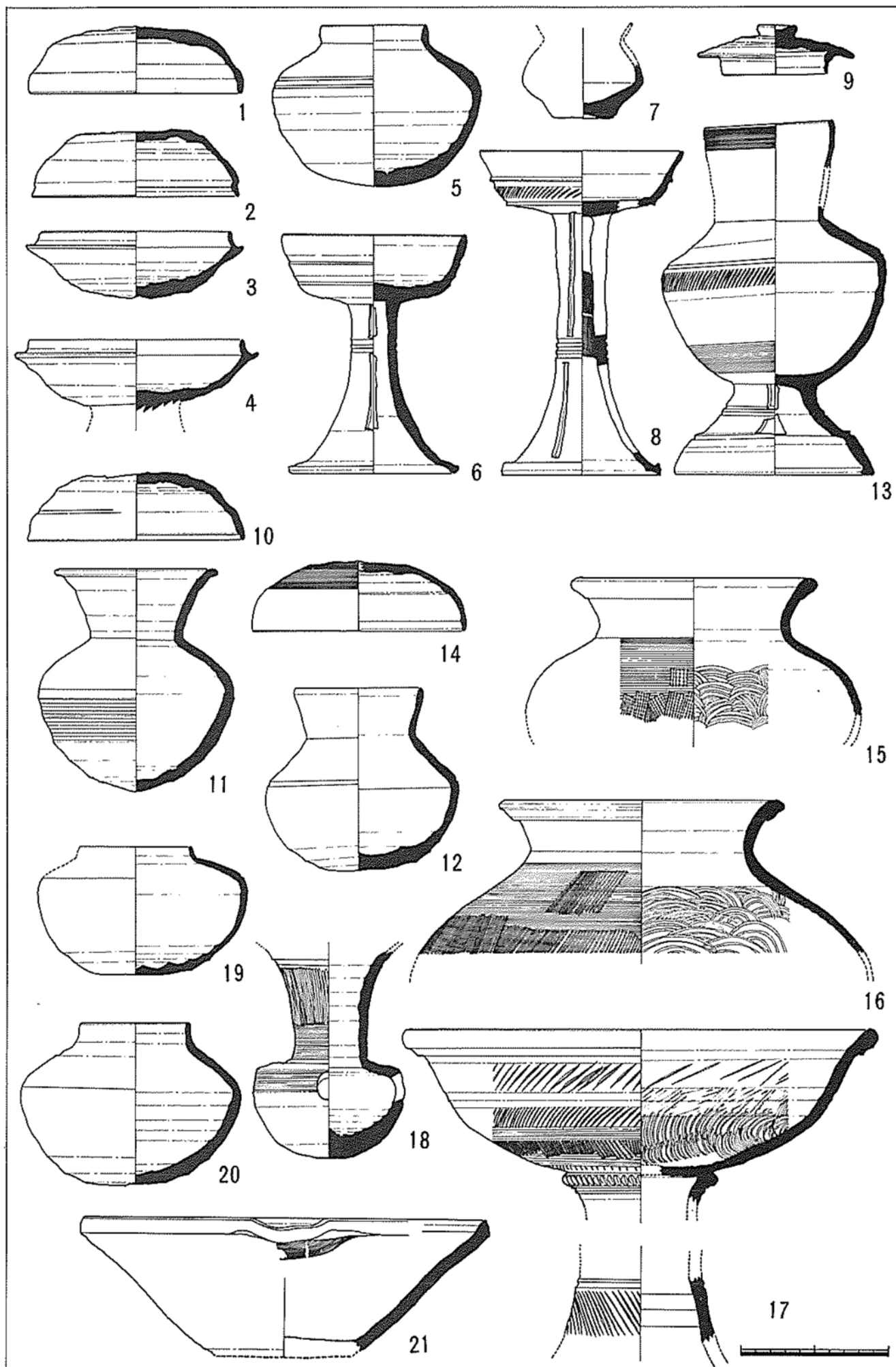
今福地区 2-3トレンチ



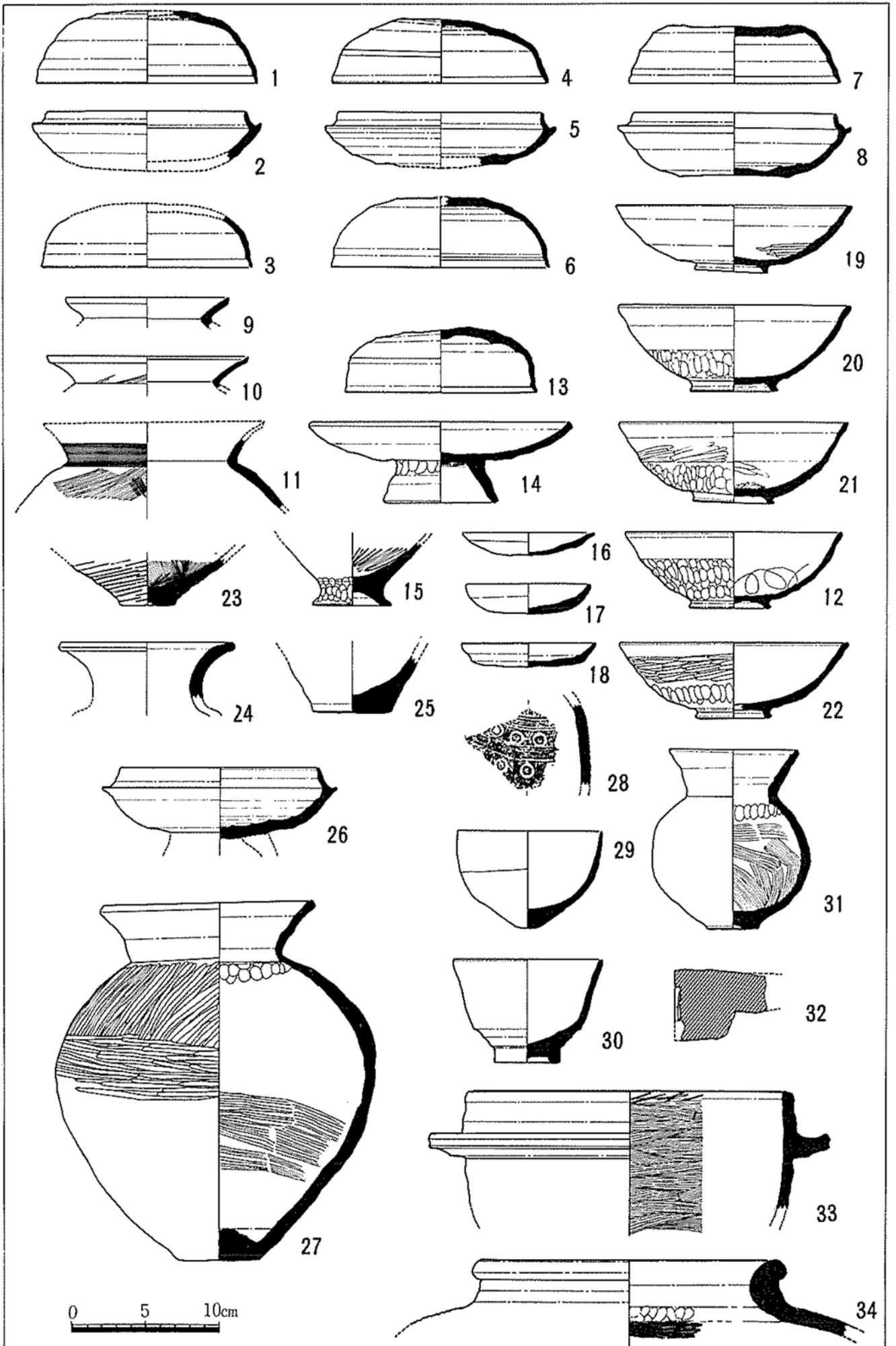


■ 灰褐色土層

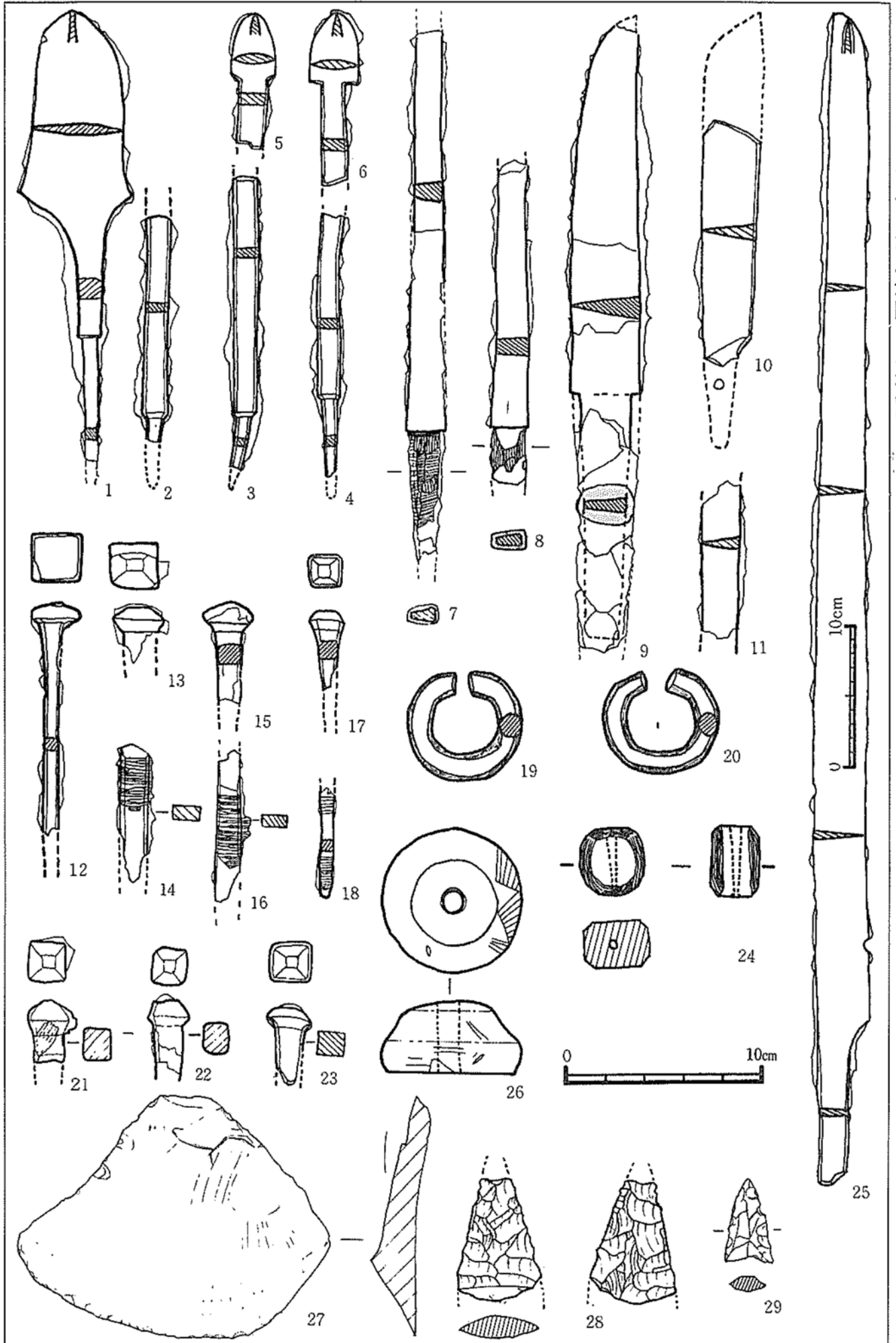




石室内出土(1~9) 木棺直葬墳出土(10・11) 前庭部出土(12) 墳丘出土(13~21)



寺門2号墳(1~8)寺門第二地区第1Tr(9~12)第2Tr(13~22)今福第1Tr(24~27)第2Tr(28~34)



1号墳第1主体出土(5. 6. 9)第2主体(7. 8. 10~25)墳丘(26) 2号墳(1~4)寺門第2地区(26. 27. 29)